

石川県埋蔵文化財情報

第 45 号

巻頭図版（庄・西島遺跡 観法寺ヤッタ遺跡 一針C遺跡 中ノ江遺跡）

令和2年度の発掘調査から 所長 伊藤雅文 … (1)

発掘調査略報

庄・西島遺跡（加賀市） (6)

観法寺ヤッタ遺跡（金沢市） (8)

一針C遺跡（小松市） (10)

中ノ江遺跡（能美市・小松市） (12)

令和2年度下半期の出土品整理作業 (14)

令和2年度環日本海交流史調査研究会の記録 金山哲哉 … (17)

石川県内の白木地埴物製品について 川畑 誠 … (19)

石川県内の埴物漆器について 向井裕知 … (26)

古代越前・若狭における埴物容器の集成 松本泰典 … (28)

古代越中の埴物容器 朝田亜紀子 … (30)

新潟県（越後国）の埴物製品について 水澤幸一 … (32)

資料検討会 金山哲哉 … (38)

調査研究報告 (39)

石川県珠洲市宇治役場裏遺跡における古代土器製塩の研究 阿部芳郎・久田正弘 … (39)

北吉田フルワ遺跡の高地性集落について 久田正弘 … (49)

古代以前の七尾城跡について 久田正弘 … (61)

2021年9月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

庄・西島遺跡

Y1区全景（上空から）

遺跡の西端部（Y1区、七日市町～津波倉町地内）の発掘調査では、平安時代の掘立柱建物や道路遺構を検出した。今回の建物は、北接する平成27年度調査区で確認している建物群に連なるものと考えられる。同地一帯は白鳳期の寺院「津波倉院寺」の包蔵地に近接しているが、今日に至るまでその詳細な位置は確認されていない。今回の調査でも過年度調査同様に古代瓦が散発的に出土するのみであり、寺院跡とみられる遺構等は確認できなかった。

道路遺構（Y1区）（南から）

南北方向に延びる道路遺構を確認した。平成27年度調査区では両側溝を確認しているが、本調査区では道路東側は水路により失われていた。道路西側の側溝は上幅90～110cm、深さ30～50cm、路面部は約200cmを測る。東側に展開する建物群の西側を限る集落道と考えられる。



Y1区全景（上空から）



道路遺構（Y1区）（南から）

写真解説

観法寺ヤッタ遺跡

調査区遠景（南東上空からかほく潟をのぞむ）

山側環状道路梅田インター近くの丘陵谷部に立地する古代の集落である。周囲に残る丘陵や谷間にも遺跡が確認されており、弥生時代から古代、中世にかけて人々の活動の様子がうかがえる場所である。

土師器の集積

谷奥に建てられた2間×2間の総柱建物近くで見つかった。この集積からやや離れた所から見つかった同様の遺構からも、11世紀前半頃の大型塚と小型塚がセットで出土した。



調査区遠景（南東上空から河北湖をのぞむ）



土師器の集積

写真解説

一針 C 遺跡

調査地遠景（北東から）

一針 C 遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成 25 年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を行っている。平成 30 年度からは改修前堤防の下を対象に調査を行っている。

令和 2 年度秋調査では、N 区最下面および O 区の上・下層を調査した。O 区は漆町遺跡ネンブツウ地区（写真左上の墓地）の北方約 100 m の対岸にあたる。

調査区全景（O 区下層）（上空から）

O 区下層では、弥生時代から古墳時代後期にかけての柱穴・土坑や溝などの遺構を検出した。下層の遺構同士が重複する上から上層遺構が切り込んでおり、著しく錯綜している。そんな中、古墳時代後期の土器類を手がかりとして 1 基の建物跡を想定することができた（本文 13 頁図参照）。主柱穴が不明で外周溝のみによる推定ではあるが、これまでの調査でも断片的に多数検出されている古代以前の不整形の落込みについても外周溝の一部である可能性がでてきた。



調査地遠景（北東から）



調査区全景（O区下層）（上空から）

写真解説

中ノ江遺跡

II-1区全景（北から）

能美市と小松市の市境に位置し、梯川の支流である八丁川右岸の標高3.0～4.0mの沖積平野に立地する。平成28年度の調査で確認したII区からIII区にかけて併走する2条の溝（SD1・SD2）の続きを検出した。このSD1・SD2は調査区北端付近で切り合っていることが判明した。

木枠井戸（南西から）

III-2区で木枠井戸を検出した。木枠は、丸木船とみられる板材を少なくとも2枚以上使用している。



II-1区全景（北から）



木杵井戸（南西から）

令和2年度の発掘調査から

所長 伊藤雅文

はじめに

令和2年度の開発に伴う緊急発掘調査は38件66,247㎡が実施され、令和元年度と比較すると9件30,762㎡増となった。県教委から当財団に委託された発掘調査は、11件で20,855㎡であった。昨年度と比較して2件増であったが約1,500㎡の調査面積減となっているのは、北陸新幹線建設に伴う取付け道路などの付帯工事にかかる発掘調査が小規模であったためである。

市町が調査主体となったのは27件45,392㎡で、7件32,207㎡の増となり著しい伸びとなった。これは、白山市や金沢市で区画整理事業による大規模な発掘調査が実施されたためである。また、学術調査や保存目的とした発掘調査は11件で、昨年度より5件の増である。

なお、コロナ禍での発掘調査では、人が集まる密集を避けるため、開催できた現地説明会は、野々市市末松廃寺跡など数える程度しかない。県民や市民に直接遺跡の成果を報告できる機会が少なかったのは、残念である。

1 石川県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査

11件の発掘調査のうち、能美市西任田遺跡、中ノ庄遺跡、小松市松梨遺跡、同市島遺跡、同市古府シマ遺跡、同市一針C遺跡、加賀市梶井衛生センター遺跡、同市弓波遺跡、同市弓波コマダラヒモン遺跡については、本誌44号（2021年3月刊行）に調査概要を掲載した。

令和2年度発掘調査遺跡一覧

No.	発掘遺跡	遺跡名	所在地	時代	調査面積	事業者	事業名
36	○	庄・西島遺跡	加賀市庄町ほか	弥生～中世	4,800	国土交通省	一般国道8号改築（加賀延福）
7	○	観法寺ヤツタ遺跡	金沢市観法寺町	古代～中世	4,630		一般国道139号改築（金沢東部環状道路）
31	○	一針C遺跡	小松市一針町	弥生～中世	3,120		橋脚改修
32		古府シマ遺跡	小松市古府町	古代～中世	2,405		
29		西任田遺跡、中ノ庄遺跡	能美市西任田町、中ノ庄町	弥生～中世	1,130	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
30	○	中ノ江遺跡	能美市中ノ江町、小松市軽川町	弥生～中世	3,050		
33		松梨遺跡	小松市松梨町	弥生～中世	300		
34		島遺跡	小松市島町	弥生～中世	290		
35		梶井衛生センター遺跡	加賀市梶井町	弥生～中世	130		
37		弓波遺跡	加賀市弓波町	弥生～中世	370		
38		弓波コマダラヒモン遺跡	加賀市弓波町	弥生～中世	700		

加賀市庄・西島遺跡の調査は6年目となった。本線の庄跨道橋撤去後の調査を行ない、既往調査区から延長した溝などの遺構を確認した。跨道橋建設時に瓦が出土したり、基壇のような構造物があったといわれているが、それに類するような遺構はなかった。また、道路遺構とそれに面する2間×3間の掘立柱建物を検出している。金沢市観法寺ヤツタ遺跡は、谷に立地する遺跡で、地鎮のような土師器皿を集めて埋められた遺構が数カ所見つかり、宗教的な性格であろう。一針C遺跡は、10月から調査を再開し、弥生～中世の遺構が複雑に重複する密集した遺構群であった。その中で古墳時代後期の平地式建物を確認できた。この時期の建物検出例が少ないので、貴重な調査例となる。北陸新幹

線付帯工事に伴う発掘調査のうち、小松市中ノ江遺跡が通年で調査を実施し、北陸新幹線本線調査で確認した遺構のつながりを把握できた。これらの付け替え道等による発掘調査が、平成28年～同29年に実施した本線調査の時に、一緒に発掘調査ができれば理想的であった。

2 市町が実施した緊急発掘調査

市町の発掘調査は金沢・野々市・松任の北加賀地域に集中しており、能登では輪島市のみ、南加賀は皆無という内容であった。市町の調査面積が急激に増加したのは、前述したとおり、金沢市と白山市における区画整理事業に伴う調査が原因である。大規模な開発による発掘調査により、新たな考古学的事実が判明することが少なくない。白山市八田中ヒエモンダ遺跡では、かなり後世の削平を受けながら、弥生時代中期の環濠集落であることを確認できたほか、玉つくり関係の遺物が大量に出土したり、他地域から搬入されたと考えられる石器をはじめ、多様な木製品も出土した。検出された旧河道が運河のような役割を果たしていたと思われ、手取川扇状地扇端の自然湧水地帯の拠点的な大集落として認識でき、北加賀の弥生時代研究に一石を投じる調査結果を得た。

輪島市大釜地区における発掘調査では中世から近世にかかる遺跡群を調査した。大釜地区は高爪山信仰にかかわる遙拝路上にもあたり、大釜3号塚はこれに直接関わる遺跡である。地域史的観点からすれば、大釜地区が中世に成立し、高爪山信仰とともに存続していった様子が見て取れる。また、輪島市本市上野遺跡では古墳時代前期の集落跡が確認され、至近にある本市テンジユク古墳群の母体となる集落であろう。奥能登の古墳時代は不明な点が多いため、大きな調査成果であった。

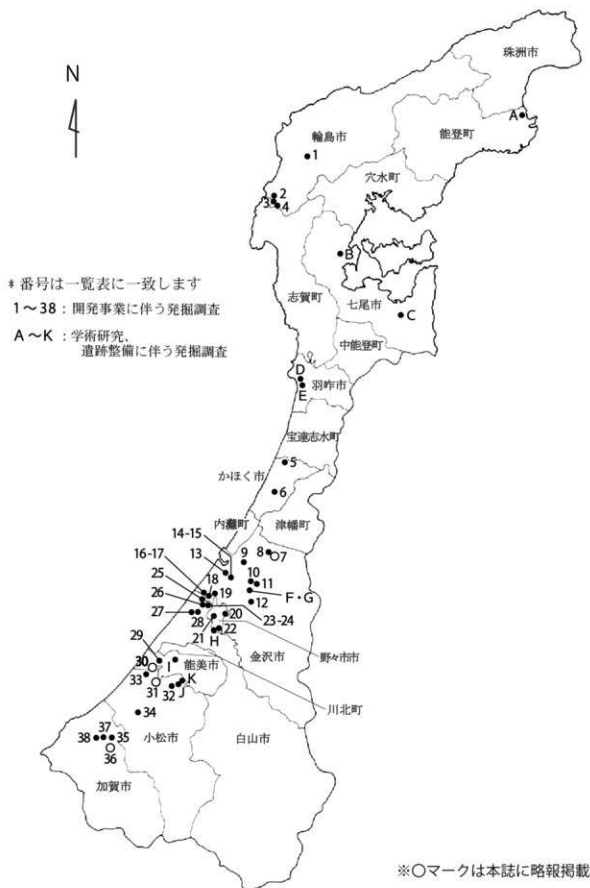
3 保存目的の発掘調査

11カ所の発掘調査が実施された。羽咋市寺家遺跡、小松市南野台遺跡、同市前田利常公灰塚は昨年度行なっていなかった調査である。

石川県金沢城調査研究所は、金沢城跡二の丸跡の確認調査に着手した。二の丸に所在した「御殿」は、その機能から「表向」「御居間廻り」「奥向」に分けられる。令和2年度は「表式台」北辺およびその北側の「広縁」にあたる部分などを調査した。建物礎石基礎が約1m四方の穴の中に川原石や戸室石の割材を埋込んだ構造であることを確認したほか、昭和44年度の調査で確認された「石室」や「くぐり抜け階段」も再調査した。また、丸の内園地石垣保全工事に先立つ確認調査が行なわれ、現石垣背後に江戸後期に築かれた土留石垣と推定する石積を検出した。

能登町旧松波城庭園の整備に伴う発掘調査が進められている。園地に伴う礎石建物や敷石遺構の他、門と思われる柱穴が確認されており、東から入る動線が復元できる。建物山側には新旧2時期の排水溝が確認され、園地遺構との関係に検証課題が残った。七尾市七尾城跡は本丸近くにある石塁が存在する「調査丸」の発掘調査が行なわれた。石塁は2時期存在することや、焼土層が確認され、石塁変遷の中にどのような時期に当たるのかなど、七尾城の本格的な解明が期待される。羽咋市寺家遺跡では、祭祀地区の重要遺構である昭和53年と平成15年の調査で検出した焼土を伴う祭祀遺構（大型焼土遺構）を含む範囲の調査を行なった。調査の目的はこの遺構の性格を明確にするとともに、史跡整備時に活用を行なうための詳細な記録を作成することである。その構造は、まず山砂で整地した上に粘土を薄く貼り、その上面で火をたく行為が行なわれ、粘土貼りからこのような祭祀行為が複数回に及ぶという大型焼土遺構の構造が明確になったほか、8世紀中頃から後半の遺構であることが明らかとなった点は重要である。

令和2年度 発掘調査遺跡位置図



令和2年度 県内遺跡発掘調査一覧

○開発に伴う緊急発掘調査

No	遺跡名	所在地	主な時代					面積 (m)	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世		
1	本市上野遺跡	輪島市門前町本市			○	○		150	市
土庫、柱穴などを検出した。土師器が出土した。包含層の下に古墳時代の遺構面を確認した。									
2	大釜西法寺跡	輪島市門前町大釜				○	○	500	市
石函、土坑、礎石、集石、暗渠、柱穴などを検出した。中世陶器、輸入磁器、近世陶磁器などが出土した。18世紀中葉以降に大規模な盛土地業を行ない平地を造成したことを確認した。									
3	大釜北集落遺跡	輪島市門前町大釜				○	○	300	市
土坑、礎石、柱穴などを検出した。中世陶器、近世陶磁器など出土した。丘陵裾を削平し、谷を埋め立てて平坦面を造成しており、建物基礎と推定される礎石や木柱を検出した。									
4	大釜3号塚跡	輪島市門前町大釜				○	○	100	市
塚跡、土坑などを検出した。近世陶磁器などが出土した。塚上面に玉石が散布されており、塚頂部で玉石を充填した方形の土坑を確認した。									
5	ニツ屋E遺跡	かほく市ニツ屋	○	○	○	○		1,148	市
内灘砂丘列の旧地表面を2面確認した。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。									
6	谷長郭遺跡	かほく市谷				○	○	86	市
小穴を検出した。緑色凝灰岩の剥片が出土した。									
7	観法寺ヤツタ遺跡	金沢市観法寺町			○	○		4,430	県
平安時代後半頃の宗教施設と考えられる掘立柱建物、地頭行為に伴う土師器坑や皿の集積を確認した。									
8	観法寺遺跡	金沢市観法寺町			○	○		280	市
古代北陸道検出地点の隣接地にあたる。古墳時代の溝と平安時代の掘立柱建物を検出した。古墳時代の土師器、平安時代の墨書土器、瓦などが出土した。									
9	千田西遺跡	金沢市千田町			○	○		320	市
弥生時代の土坑、溝、川跡などを検出した。弥生土器、石筭などが出土した。									
10	金沢城下町遺跡(尾張町1丁目1番地点)	金沢市尾張町					○	200	市
調査区は北国街道沿いの町人地の一角にあたり、近世の井戸、ゴミ穴、石組などを検出した。									
11	金沢城下町遺跡(機場町2番地点)	金沢市機場町				○	○	1,004	市
調査地は武家地にあたり、土坑や石列、井戸などが検出され、近世陶磁器や木製品などが出土した。また、下層からは古代の須恵器や土師器などが出土した。									
12	菊川1丁目遺跡	金沢市菊川						1,400	市
江戸時代の足輕屋敷の屋敷割を確認した。道路、井戸を検出した。									
13	南新保C遺跡	金沢市南新保町			○	○		5,154	市
弥生時代の方形周溝墓、堅穴建物、古墳時代の円墳、平地式建物、平安時代の川跡などを検出した。弥生土器、土師器、須恵器、木製品、玉類、墨書土器などが出土した。									
14	南新保D遺跡	金沢市南新保町			○	○		969	市
弥生時代～古墳時代の溝を検出した。弥生土器が出土した。									
15	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保町			○	○		1,312	市
弥生時代～古墳時代の土坑、溝、小穴を検出した。弥生土器、須恵器が出土した。									
16	打木町東B遺跡	金沢市打木町		○	○			5,000	市
弥生時代の川跡、江戸時代の水路などを検出した。									
17	打木町東C遺跡	金沢市打木町		○	○			3,700	市
縄文～弥生時代の川跡、江戸時代の水路などを検出した。									
18	中屋B遺跡	金沢市中屋町		○	○			2,660	市
古代の掘立柱建物のほか、縄文晩期～弥生後期の川跡や棚状遺構などを検出した。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、打製石斧、木製品などが出土した。									
19	矢木ヒガシウラ遺跡	金沢市矢木		○	○	○	○	106	市
鎌倉時代の土坑、江戸時代の溝などを検出した。江戸時代の溝からは陶磁器が出土した。									
20	富樫館跡	野々市市扇が丘			○	○		153	市
土坑、並走する溝などを検出した。									
21	蓮花寺アカグロ遺跡	野々市市蓮花寺町				○	○	2,400	市
古代から中世の掘立柱建物、区画溝を検出した。区画溝は方位を変えて2時期以上にわたると考えられる。									
22	末松遺跡	野々市市中林		○	○	○		3,400	市
古代と中世の遺構面を確認した。中世の遺構面では掘立柱建物、堅穴状遺構、土坑、古代の遺構面では堅穴建物、土坑を検出した。									
23	横江古屋敷遺跡	白山市横江町			○			630	市
弥生時代の平地式建物、方形周溝墓、古墳時代の前方後方墳を検出した。									
24	横江A遺跡	白山市横江町			○	○		1,000	市
弥生時代の堅穴状遺構、川跡、鎌倉時代の掘立柱建物を検出した。									
25	八田中ヒエモンダ遺跡	白山市八田中町		○	○	○		12,000	市
弥生時代の平地式建物、環濠、土坑、溝、弥生時代から中世にかけての川跡を検出した。弥生土器、ヒスイ製の勾玉、陶磁器が出土した。									

26	福増遺跡	白山市福増町		○	○					536	市
弥生時代の土坑、溝を検出した。弥生土器、石器が出土した。											
27	相木カミノオキヨウ遺跡	白山市相木町		○		○				812	市
弥生時代の集落跡を確認した。弥生土器、須恵器が出土した。											
28	新田ヒガシウラダ遺跡	白山市新田町				○				72	市
古墳時代の土坑を検出した。土師器が出土した。											
29	西任田遺跡、中ノ庄遺跡	能美市西任田町他		○	○	○	○			1,150	県
弥生時代の溝、平安時代後期～中世初期の掘立柱建物、井戸、区画溝などを検出した。											
30	中ノ江遺跡	能美市中ノ江町		○	○	○	○			3,050	県
弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、古代の溝、小穴などを検出した。											
31	一針C遺跡	小松市一針町		○	○	○	○			3,120	県
複数の遺構面を確認した。上層では中世の掘立柱建物、井戸、下層及び最下層では弥生時代中～後期、古墳時代後期の平地式建物や掘立柱建物、弥生時代中期の環濠を検出した。											
32	古府シマ遺跡	小松市古府町				○	○			2,405	県
複数の遺構面を確認した。平安時代の柱穴、井戸、土坑、南北方向に延びる溝、丘陵部の凹地への遺物堆積層、古代末～中世後半までの井戸、土坑、溝を検出した。											
33	松製遺跡	小松市松製町		○	○	○	○			330	県
中世の区画溝、中世以降の畝溝などを検出した。											
34	島遺跡	小松市島町		○	○	○	○			290	県
古代の溝、中世の掘立柱建物を検出した。											
35	梶井衛生センター遺跡	加賀市梶井町		○	○	○				150	県
弥生時代の土坑、溝、平安時代の掘立柱建物の柱穴、井戸を検出した。											
36	庄・西島遺跡	加賀市庄町他		○	○	○	○			4,860	県
縄文時代中期の土坑、古代の掘立柱建物、道路遺構、土坑、中世の溝を検出した。道路遺構の路面や備溝から瓦片、建物柱穴から黒書土器が出土した。											
37	弓波遺跡	加賀市弓波町		○	○	○	○			370	県
古墳時代～平安時代の掘立柱建物のほか、旧八日市川の流路を検出した。											
38	河波コマダラヒモン遺跡	加賀市弓波町他		○	○	○	○			700	県
河原跡を検出し、上層からは古墳時代前期の土器、下層から弥生時代後期の土器と木製品が出土した。											

調査担当 県：県埋文センター、市・町：市・町教育委員会等

◎学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代					面積 (㎡)	調査 担当	
			縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世
A	旧松波城庭園	能登町松波					○		400	町
園地遺構、礎石建物、礎石遺構などを確認した。										
B	中島殿山1号墳、2号墳	七尾市中島町中島			○				10	市
古墳の裾部を確認した。										
C	七尾城跡	七尾市古屋敷町他					○		95	市
本丸周辺部にある調査丸の調査、石垣の構造を確認した。礎石、石敷遺構、池（溝）状遺構を検出した。土師皿、珠洲焼、瀬戸美濃焼（天目茶碗）、焼瓦などが出土した。										
D	柳田シャコダ庵寺跡	羽咋市柳田町他			○		○		200	市
古代寺院「シャコダ庵寺」の保存目的のための確認調査。寺院を区画する「回廊状遺構」とみられる並走する2列の柱穴跡を検出し、寺城南半を確定するための重要な成果を得た。										
E	寺家遺跡	羽咋市寺家町他		○	○	○	○		140	市
古代祭祀遺跡「寺家遺跡」の整備のための確認調査。重要エリア「祭祀地区」の特殊遺構「大型焼土遺構」を再発掘し、遺構の性格の再検討、史跡整備のための詳細記録作成などを実施した。										
F	金沢城跡（二ノ丸）	金沢市丸の内						○	1,000	城
二ノ丸における遺構の遺存状況などを確認する調査。二ノ丸御殿の表式台北辺に対応する礎石基礎列などを確認。										
G	金沢城跡（数寄屋敷西）	金沢市丸の内							60	城
昭和53年修理石垣裏込堀の範囲を確認した。また、黒縁石垣背後の斜面で江戸後期に築かれた土留石垣を確認。										
H	末松庵寺跡	野々市市末松			○	○	○		73	市
金堂北東隅の調査を行い、金堂の建物の地盤改良（掘込地盤）に多量の礫が敷き並べられる、類例の少ない工法が採用されていることを確認した。										
I	西山古墳群	能美市徳久町			○				40	市
西山8号墳の横穴式石室跡を確認した。須恵器片が出土した。										
J	南野台遺跡	小松市古府町		○	○	○	○		110	市
古代の礎石遺構、中世の礎石総柱建物を検出した。土師器、須恵器、カワラケ、陶磁器片が出土した。										
K	前田利常公塚塚	小松市河田町					○		10	市
灰塚北側の高まりを調査した。南側周溝を跨ぐ通路（土橋）は後世の盛土であり、周溝が連続することを確認。										

調査担当 市・町：市・町教育委員会等 城：県金沢城調査研究所

※本データは、発掘調査報告会資料（R3.3.7）から転載（一部改変）したものである。

しょう にし じま
庄・西島遺跡

所在地 加賀市桑原町・津波倉町地内他
調査面積 4,860㎡

調査期間 令和2年5月11日～令和2年12月14日
調査担当 金山哲哉 齊藤綾乃



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区配置図



V4区透景 (西から)

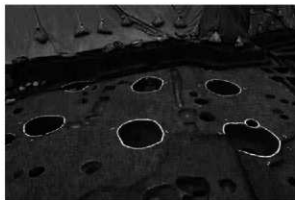
調査成果の要点

- ・V4区では、総柱建物跡を含む掘立柱建物跡(奈良・平安時代)2棟のほか、古墳時代の溝跡を確認した。
- ・X3区東端部の微高地縁辺で、縄文時代中期の土坑と中世の溝跡を確認した。
- ・Y1区では、古代瓦が出土する南北方向の道路遺構と、同遺構と方向を揃えた平安時代の掘立柱建物跡2棟を確認した。

庄・西島遺跡は、江沼平野のほぼ中央に位置する、弥生時代後期、奈良・平安時代～中世の集落遺跡である。約1km四方の広大な推定域を有する本遺跡は、この地域の中心的な集落の一つと考えられている。本遺跡の発掘調査には、一般国道8号改築(加賀拡幅)工事の原因として平成27年度から着手しており、今回で6年目の調査となる。調査地は、遺跡の東部に位置する桑原町地内の1地点、V4区(約590㎡)と、西部に位置する津波倉町地内の2地点、X1～3区(約3,850㎡)とY1区(約420㎡)の計3地点に分かれる。

これまでの調査から、V4区は、東西を古代の河道に挟まれた東西約100mの微高地の西端に位置し、東側は古代の建物域に、西側は古代の河道と接することが判っている。今回の調査では、古墳時代の溝跡1条のほか、奈良・平安時代の総柱建物と掘立柱建物、各1棟を検出した。同状況から、西側の河岸際まで古代の建物域が展開していることが明らかとなった。

また、西部の調査箇所については、庄跨道橋を境に東側にX1～3区を、西側にY1区を設定し、調査を行った。西から1～3区に分割したX区については、微高地の西端に位置するとみられる東端のX3区で、縄文時代中期の大小土坑数基を確認したほか、同微高地直下に北西～南東方向に併走する3条の中世溝を確認した。以西のX区域については安定した基盤層が広がるものの、掘立柱建物を



V4区総柱建物（北から）



X3区完掘状況（北東から）



Y1区道路遺構（南から）



Y1区掘立柱建物（南東から）

確認した Y1 区に比して地山面が 1.5 m 前後も低く、同環境に起因するものか遺構はほぼ皆無で、遺物も流れ込み程度という内容にとどまった。

対して庄跨道橋西側の一帯は、白鳳期の寺院「津波倉廩寺」の包蔵地と重複する区域である。付近では、事業地北側に近接する農協倉庫建設に伴い昭和 53 年に加賀市教育委員会によって行われた調査や、北側の事業地で平成 27 年度に当センターが実施した調査において古代の建物群が確認されているが、これらの調査を経た現在も寺院跡の確認には至っていない。残念ながら今回の Y1 区でも寺院跡と判断される遺構等は確認できなかったが、南北方向に延びる道路遺構と、その東側には同遺構と方向が一致する 1 間 × 3 間及び、3 間 × 3 間の掘立柱建物 2 棟を新たに確認した。遺物では、後者の建物柱穴から平安時代の須恵器が出土し、中には「否□（利？）万呂」と判読可能な墨書土器もみられた。

道路遺構については、側溝部分を除いた路面幅が約 200cm（平成 27 年度調査時の完存幅は約 230 ~ 260cm）を測り、西側の側溝（上記調査時の完存部は両側溝）は幅 90 ~ 110cm、深さ 30 ~ 50cm を測った。路面に相当する部分では波板状凹凸面を検出、その補強を意図として散布されたものか、波板状凹凸面覆土には拳前後大の礫が多数含まれていた。これらの遺構周辺からは須恵器・土師器などとともに古代瓦が出土しているが、過去の調査同様に調査区一帯に点在する状況にとどまり、寺院位置特定につながるようなまとまった出土状況は確認できなかった。なお、この道路遺構以西については攪乱が多く、遺構と認識できたのは掘立柱建物 1 棟のみであった。

平成 27 年度並びに今回の調査成果を踏まえると、次年度調査予定である Y1 区～庄跨道橋間には、整然と配置された建物域が広がるものと考えられる。次年度調査では、古代寺院遺構の発見もさることながら、古代江沼郡の中心的集落についての詳細が一層明らかになるものと期待される。

（金山哲哉）

かんぼうじ 観法寺ヤッタ遺跡

所在地 金沢市観法寺町地内
調査面積 4,340㎡

調査期間 令和2年6月12日～令和2年12月11日
調査担当 山川史子 畝麻由美 西山美那



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・丘陵部の谷間に営まれた古代の集落。
- ・掘立柱建物や河、溝など今回確認できた遺構の多くは平安時代後期のものと考えられる。
- ・Ⅵ区の掘立柱建物は、規模や周囲の出土品から谷間の奥に建てられた宗教的な施設と考えられる。
- ・土師器塚がまとめて置かれた場所が3カ所確認できた。
- ・河、溝からは観法寺ジンヤマ窯跡で焼成された瓦が出土した。

観法寺ヤッタ遺跡は、金沢市北東部、森下川流域の右岸丘陵谷部に立地し、金沢東部環状道路(国道159号・通称山側環状)改築に伴い、平成30(2018)年度に1次調査が実施され今回は2次調査となる。1次調査区(Ⅰ区～Ⅳ区)の東側で、山側環状道路へ向かい標高が高くなっていく傾斜地の南側をⅤ区、北側をⅥ区として調査を実施した。また、今後の調査の準備として、観法寺ヤッタ遺跡北側の丘陵上にある観法寺墳墓群の地形測量も実施した。

Ⅴ区は2面あり、上層は西側で古代の小穴の他、土師器塚がまとめて出土する土坑(平面図の①)の位置を確認した。西側は近現代の攪乱を受けた部分があり、北西部(Ⅵ区との境側)は上層面が残存していない。また、2002年度確認調査時のトレンチをⅤ区中央部で南北方向に確認した。東側は整地土によるあざ遺状の区画が南北方向に走り、その東側のため池状の堆積や木製取水口を検出したが、古い地図や写真から近現代の遺構と判断した。

Ⅴ区・Ⅵ区の下層は、東西に走る平安時代の河、その東端あたりで南北に走る溝などから、調査区北側の丘陵斜面にある観法寺ジンヤマ窯跡で7世紀後半代に焼成された軒丸瓦、平瓦が出土した。齋串や建築部材、下駄、曲物などの木製品、古代の土師器、須恵器、鉄鍋破片や鉄滓などの铸造関連遺物も見られた。また管玉未成品、縄文土器、石匙や打製・磨製石斧、凹み石などの石器も見られ、該当時期の遺跡の存在がうかがわれる。河と溝の交わる地点には水溜様の土坑が存在し、それより山側にはトチノミなどの種類が出土する自然流路が続いている。Ⅵ区中央部では2間×2間の総柱建物1棟、その近くから2カ所の土師器塚の集積(②、③)を確認した。掘立柱建物の柱穴は径60～70cmほどで、柱材が残るものや、底近くから伏せた土師器塚が出土するものもあった。

近隣の観法寺古墳群の丘陵斜面には鎌倉時代の祭祀の空間の存在が想定され、その南側谷部の観法寺谷遺跡では13～14世紀代に水に関わる祭祀が行われたと考えられている。観法寺ヤッタ遺跡の谷奥側にはそれらに先立つ古代末頃の祭祀の空間が広がっていたと推定される。(山川史子)



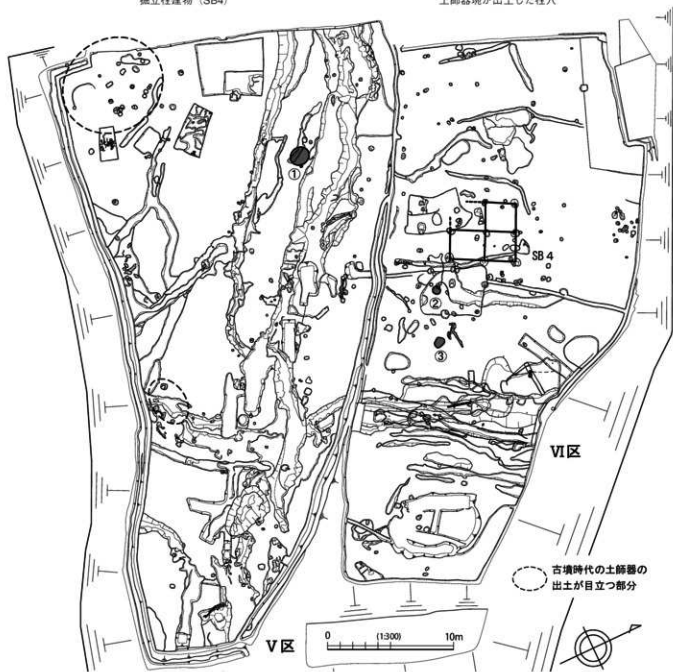
調査区位置図 (S=1/4000)



掘立柱建物 (SB4)



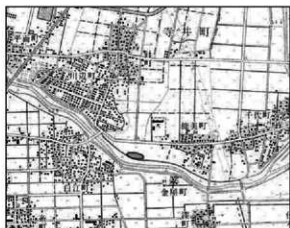
土師器境が出土した柱穴



V区・VI区下層平面図 (S = 1/300)

ひとつはり
一針 C 遺跡

所在地	小松市一針町地内	調査期間	令和2年10月16日～令和3年1月14日
調査面積	3,120㎡（今回報告分2,020㎡）	調査担当	浜崎悟司 水田 勝 小森康弘 山内花緒 畝 麻由美 寶珍貴史



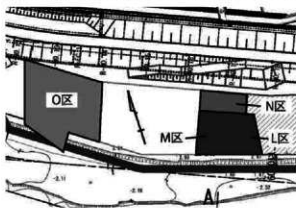
遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・O区において、上層で古代末～中世末頃、下層で弥生時代～古墳時代末頃の集落跡の調査を実施した。
- ・下層では古墳時代後期の周溝を持つ平地建物などの遺構を検出した。
- ・全域で下層検出面下に黒色粘土層の帯が認められた。黒色粘土帯には倒木によるとみられる隆起や断裂が数カ所で観察され、当該地区が長期にわたり河川による浸食を免れてきたことを窺わせた。

一針C遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成25年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を行っている。今号ではO区上層並びに同区下層について記す。

O区は春調査のM区並びにN区から40m程度下流側の旧堤防下にあたる。北東辺の外側（新堤防下）は平成26年度に、南西辺の外（現河道）側は平成29年度にそれぞれ発掘調査済である（略報本誌36・40号）。調査区南西辺は旧堤防の河道側の裾に当たるため上層面が削平を被っている他は、上下2面の検出面であった。上層面は標高2.30～2.45mを、下層面は2.05～2.35mを測る。下層面は大略現河道に向かって降る緩い傾斜をもつほか多少の部分的な起伏があり、上層面との間に間層がほとんど認められなかった部分もある。深い遺構の周壁観察によれば、下層面下位の標高1.4m前後には黒色粘土の3cm程の薄層と20cm以上の厚みをもった層とが数cm厚の白色粘土層を間に挟んで普遍的に認められ、層群が隆起する箇所も複数観察された。隆起は倒木にともなう根元の持ち上がりによるとみられ、当地が弥生時代中期に居住地化するよりもかなり以前から河道になったことのない安定した地面であり続けたことを示すものであろう。



調査区割図



調査地全景 (西から)

上層では主に中世後半期とみられる堅穴状遺構、井戸、掘立柱建物柱穴多数などを検出した。調査区南東辺はベースが降り、低地域へ移行する落ち肩となる。落ち肩検出区間の中央部は溜め池状の落ち込みSX02となっており、埋土各層から多量の石材片が検出された。北東辺にかかる井戸SE04は凝灰岩板石製の井戸側を持つもので、井戸側頂部に組まれたとみられる箱形に加工された石材を側内から検出した。本誌36号掲載のF区上層板石組井戸と近似した構造とみられる。

下層の調査は高密度に展開する遺構を上層遺構が切り込むという錯綜の中で実施した。現在までに古墳時代後期頃とみられる掘立柱建物、平地式建物を認識し、それらとセットをなす遺構を抽出できるか試行中である。平地式建物はO区中央付近の土坑と溝などを一連の外周溝に見立てて推定するもので、周溝に囲まれる範囲の差し渡し12m前後に復元される。現地調査末期に可能性に気付いたもので、柱組の想定位置については精査したにもかかわらず明らかにできなかった。周溝から6世紀末頃の須恵器・土師器類が出土している。掘立柱建物は直径40cm程度の8基の柱穴から構成される南北2間(4.5m)×東西3間(6.8m)(以上)のもので、長軸はN7°Wを指す。土坑(SK31)は西辺を上層の井戸(SE06)に切り込まれているが、一辺1.2m深さ80cm程度の方筒状に復元しよう。古墳時代の土師器が出土している。土坑底に長さ87cm程度に切り揃えた幅20cm弱の板材が10枚程度敷き詰められていた。敷板の長軸は想定した建物と揃う感があり、同時性が担保されているわけではないが当時の集落構成の一端を担うことも考えられる。なお下層からは弥生時代中期・後期の溝や土坑なども検出されていて、量的にはこちらの方が多いが、セット関係の検討等の作業は今後の課題である。

(浜崎悟司)



(SE04)



(SX02)



SK31



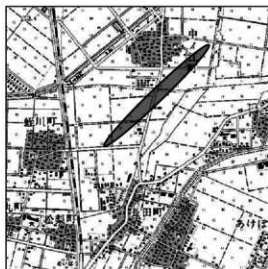
() は上層の遺構

O区下層平面図 (S 約 1/400)

なかのこう 中ノ江遺跡

所在地 能美市中ノ江町、小松市蛭川町地内
調査面積 3,050㎡

調査期間 令和2年4月20日～同年12月14日
調査担当 中家正之 島田亮仁



遺跡位置図 (1/25,000)



調査地遠景 (南西から)



調査区配置図

調査成果の要点

- ・弥生時代後期後半から中世の集落を確認し、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、小穴を検出した。
- ・丸木船とみられる板材を転用した木枠井戸を確認した。

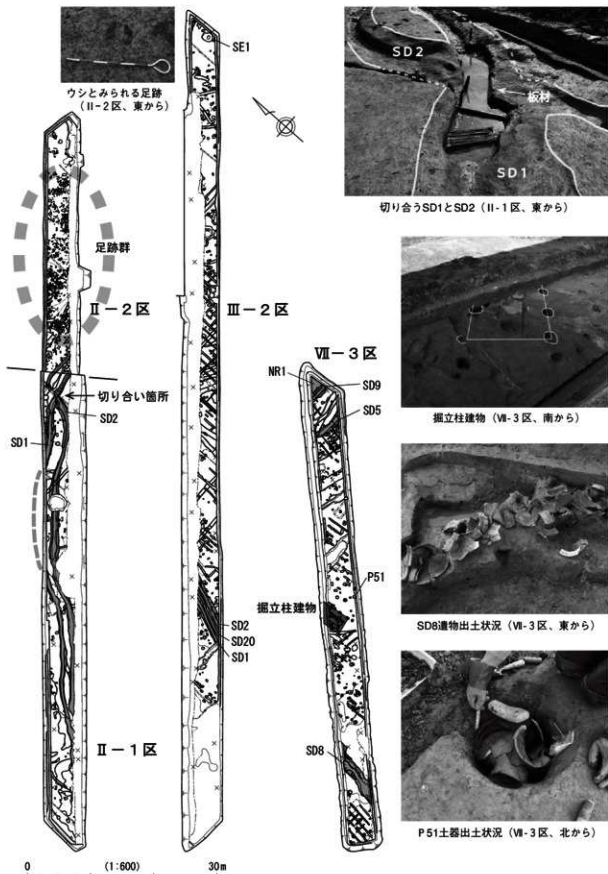
中ノ江遺跡は、能美市と小松市の市境に位置し、梯川の支流である八丁川右岸の標高30～40mの沖積平野に立地する。平成28年度に北陸新幹線建設に伴う調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての掘立柱建物を中心とする集落が確認された。今年度は北陸新幹線工事にかかる取付け道路工事に伴い調査を実施した。

Ⅱ-1・2区からⅢ-2区にかけて弥生時代後期から古墳時代の井戸、土坑、溝、柱穴などを検出した。このうち平成28年度調査で既に確認していた北東から南西に併走する2条の溝の続きを調査し、Ⅱ-1・2区の境界付近で切り合っていることが判明した。切り合い部分のSD1は一段深く掘削されており、西側壁面を板材で補強されていた。先後関係はSD2→SD1が想定されるが、時期差はほとんどないと考えられる。また、この2条の溝の外側（北東～西側）は遺構密度が希薄であることから集落域を区画する役割が考えられる。また、溝より外側では偶蹄類（ウシ?）の足跡なども確認しており、ある時期には水田などの生産域として利用されていたことが推定される。Ⅲ-2区のSE1（古墳時代）では丸木船を転用したとみられる木枠井戸を確認した。

Ⅳ-3区では掘立柱建物、土坑、溝、柱穴を検出した。掘立柱建物は1間×2間以上が確認できる。また、SD8では一括性の高い弥生土器が出土した。これらの遺構の配置や変遷については平成28年度調査成果も含めて、今後の検討すべき課題である。

出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、木製品がある。

(島田亮仁)



中ノ江遺跡遺構図 (S = 1/600)

令和2年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

令和2年度下半期は、八日市地方遺跡（小松市 平成28・29年度調査）の金属器・骨角器の実測・トレース、土器の記名・分類・接合作業を行った。

金属器は煙管・銅銭、骨角器は鹿角製のヤス・加工品、鹿骨製の刺突具、クジラの椎端板をそれぞれ実測・トレースした。土器の記名・分類・接合では、C-3区（平成28年度調査）、C-3区西（平成29年度調査）の川跡最下層のL層からC層の一部までを対象とした。弥生時代中期の土器が主で、壺・甕・高坏等のほか、円盤状土製品や分銅形土製品、土玉、小型土器、用途不明土製品等の土製品が多く出土している。一括で取り上げられたもののほかにも広範囲で出土した破片が接合するため、区・層を越えての同一個体の搜索に多くの時間を費やすこととなった。また、細かい破片が多く、接合・復元に時間の要するものが多くあった。本来ならば川跡は全ての層を一挙に開きたいところであったが、C層より上層と他の遺構は来年度に持ち越しとなる。（横山のみ）



土器の分類・接合



土器の分類・接合



土器の接合



用途不明土製品

県関係調査グループ

令和2年度下半期は、弓波遺跡（加賀市 平成28年度調査）の整理作業を行った。

弓波遺跡は、上半期に引き続き、土器の記名・分類・接合作業を行った。弥生土器・土師器を中心に器台・高坏の脚部部分、甌、小型の壺・甕が比較的多く見られ、須恵器は坏蓋・坏身、高坏、甌、円筒埴輪の破片等が見られた。

続いて、石器の記名・分類作業を行った。弓波遺跡は、古墳時代前期の石製品製作地ということもあり、碧玉製品の製作に伴う石材等が多く出土しており、中でも細かい剥片については遺構が混同しないよう、細心の注意をはらいながら分類作業にあたった。石製品は他にも、砥石、磨石、宝篋印塔、石臼、炉石等が見られた。

（澤山 彬）



土器の接合



土器の石膏入れ



石器の分類



石器の記名・分類

特定事業調査グループ

令和2年度下半期は、柳田猫ノ目遺跡他3遺跡（柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡、寺家遺跡）（羽咋市 平成27～30年度調査）、園町遺跡（小松市 平成29年度調査）の整理作業を行った。

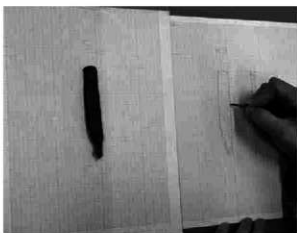
柳田猫ノ目遺跡他3遺跡は、上半期に引き続き、土器・石器・木製品・金属器の実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。木製品では、箸の実測で、より詳細な記録のため、2面ほど多く実測した。また、取手付の桶や鞘などがあり、実測に手間取った。石器では、管玉や初めて見る耳飾りなどを実測した。遺構図トレースは久しぶりの作業となったため、勘を取り戻すまでに少し時間がかかった。

園町遺跡は、大型土器・大型石製品・金属器の実測・トレース作業を行った。大型石製品の井戸枠は重量があり、実測1面ごとに2、3人でひっくり返しながらの実測となった。金属器には釘が多くあり、中には未使用のものもあった。また、天秤皿や菊花小皿など初めて見るものもあった。

（土生久美子）



取手付桶（柳田猫ノ目遺跡他3遺跡）



金属器の実測（柳田猫ノ目遺跡他3遺跡）



大甕の実測（園町遺跡）



井戸枠の実測（園町遺跡）

令和2年度 環日本海文化交流史研究集会の記録

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流史調査研究事業」の一環として実施しており、令和2年度で第21回目の開催となる。

今回の研究集会は、日本海沿岸各地域から出土した古代～中世の木製容器、中でも挽物の変遷や地域性に焦点を当て、本県の特徴を明らかにすることを目的とするものである。第18回目の開催となった平成29年度より、調査研究の深化・充実を目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とする形態で行っている。今年度はその2年目となる研究集会の開催年であったが、前年度より全国的に感染拡大するコロナウイルスの影響は本県も例外ではなく、寧ろ近隣他県に比して本県の感染状況は楽観視できるものではなく、本集会参加の講師の方々を交えての基礎研究については、関係者の感染回避のため実施を断念せざるを得なくなってしまった。しかしながら、本集会については日本海側各地から講師の方々に参集いただき、過年度実績に比して小規模ながらも研究集会の開催に漕ぎつけることができた。

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者。35名。
- 4 内容及び日程

日 程：令和3年2月19日（金）10時～16時

テーマ：「古代の木の器（うつわ）－その2」

・報告、討論

- 石川県(1) 川畑 誠（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
石川県(2) 向井裕知（金沢市埋蔵文化財センター）
福井県 松本泰典（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
富山県 朝田亜紀子（富山県埋蔵文化財センター）
新潟県 水澤幸一（新潟県胎内市役所）



講師1



講師2



会場の様子



討論の様子

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載 『石川県埋蔵文化財情報』
第1回	2001.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	2002.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	2003.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	2003.10.24	縄文後晩期の低湿地集落—生業の視点で考える	第11号
第5回	2004.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	2005.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通—甕・壺・摺鉢を中心に—	第15号
第7回	2006.10.27	縄文時代の装身具—漆製品・石製品を中心に—	第17号
第8回	2007.10.26	日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—	第19号
第9回	2008.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	2009.10.23	日本海域の土器製造—その系譜と伝播を探る—	第23号
第11回	2010.10.29	近世日本海域の陶磁器流通—肥前磁器から探る—	第25号
第12回	2011.10.28	中世日本海域の墓標—その出現と展開—	第27号
第13回	2012.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	2013.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	2014.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	2015.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	2017.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	2018.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相—カワラケを中心に—	第39号
第19回	2019.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相—城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に—	第41号
第20回	2020.2.26	古代・中世の木製容器	第43号
第21回	2021.2.19	古代の木の器（うつわ）—その2	本号（第45号）

石川県内の白木地挽物容器について

川畑 誠（公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

古代北陸地方の挽物容器研究は、四柳嘉章氏の古代～近世の漆器製作技法に関する一連の研究〔四柳 1991・92〕を大きな契機とする。氏は、古代の上質な漆下地漆器に加えて、11世紀に簡素な漆下地漆器が出現、北陸・関東以北の地域で安価に量産できる漆下地漆器が急速に普及することを明らかにした。この成果に触発され、1990年代に古代から中世への食器転換に関して、北陸古代土器研究会、北陸中世土器研究会がそれぞれ視点を変えながら活発にアプローチを進めている。また、全国規模では、第39回埋蔵文化財研究集会「古代の木製食器」〔1996〕、国立歴史民俗博物館の中世食文化に関する共同研究〔国歴博 1997〕等が到達点の一つといえよう。近年では、全国の出土木製品の集成・データベース化〔山田他 2012〕や、能登の古代挽物容器の樹種、木取り等に関する研究〔久田 2019〕が目すべき成果を得ている。

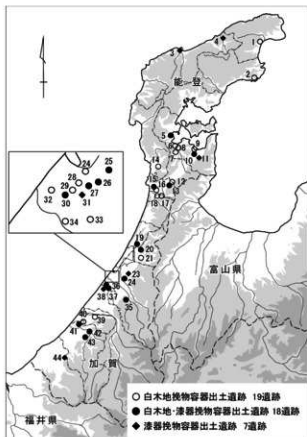
以下では、これら先学の諸成果に立脚して、石川県内の白木地挽物容器の概要を報告する。

2 出土状況

出土遺跡 県内の8～11世紀代の白木地挽物容器（荒型含む）出土遺跡は37遺跡で、内訳は白木地のみ出土遺跡が19遺跡、白木地・漆器出土遺跡が18遺跡と、同程度を数える（第1図・第1表）。分布状況は、第1図のとおり大規模開発が進む金沢臨海部が目立つものの、現時点で顕著な地域的偏在性を見いだせない。

遺跡の性格別では、一定レベル以上と評される遺跡または工房に類する遺跡が大部分を占める。おおまかに分類すれば、国衙関連遺跡（No 11 小池川原地区遺跡）、加賀郡の港湾関連遺跡（No 24～33 金沢臨海部）、公的要素をもつ遺跡（No 13 四柳白山下遺跡、No 20 加茂遺跡、No 40 高堂遺跡等）、荘園関連遺跡（No 36 中屋サワ遺跡～38 横江庄遺跡、No 39 徳久・荒屋遺跡）、社寺関連遺跡（No 19 指江B遺跡、No 35 三小牛ハバ遺跡、No 43 浄水寺跡）、祭祀遺跡（No 9 小島西遺跡等）、工房（No 5 下笠師E遺跡、No 15 寺家遺跡等）となり、多岐にわたる所有・使用の実態がうかがえる。

出土状況 素材の特性上、含水率の高い溝、河道から大部分が出土する。これら以外は限定的で、建物柱穴1例（No 28 無量寺C遺跡（無台椀1））、井戸・大型土坑7例となる。後者の内訳は、No 5 下笠師E遺跡（荒型10 + 齋串）、



第1図 石川県内の8～11世紀代白木地挽物容器等出土遺跡

第1表 石川県内の8～11世紀代検出一覧表

遺跡番号	遺跡名	出土遺物	時期	日本産物 (出資・買取)				産地	再産物			遺跡	日本産物 (出資・買取)				再産物		
				銅	鉄	土	石		銅	鉄	土		石	銅	鉄	土	石		
1	東方遺跡	銅貨もみみ	古銅～10c																
2	高松遺跡	銅貨等類	古銅～10c	4	2														
3	東海中津城跡	土瓦	古銅～10c																
4	東海中津城跡	銅貨、銅貨	古銅～10c																
5	下宮跡	銅貨	古銅																
6	三石遺跡	銅貨	古銅～10c	2															
7	志保川遺跡	土瓦	古銅～10c	2															
8	小島遺跡	銅貨	古銅																
9	小島遺跡	銅貨	古銅																
10	小島遺跡	銅貨	古銅																
11	小島遺跡	銅貨	古銅																
12	小島遺跡	銅貨	古銅																
13	小島遺跡	銅貨	古銅																
14	小島遺跡	銅貨	古銅																
15	小島遺跡	銅貨	古銅																
16	小島遺跡	銅貨	古銅																
17	小島遺跡	銅貨	古銅																
18	小島遺跡	銅貨	古銅																
19	小島遺跡	銅貨	古銅																
20	小島遺跡	銅貨	古銅																
21	小島遺跡	銅貨	古銅																
22	小島遺跡	銅貨	古銅																
23	小島遺跡	銅貨	古銅																
24	小島遺跡	銅貨	古銅																
25	小島遺跡	銅貨	古銅																
26	小島遺跡	銅貨	古銅																
27	小島遺跡	銅貨	古銅																
28	小島遺跡	銅貨	古銅																
29	小島遺跡	銅貨	古銅																
30	小島遺跡	銅貨	古銅																
31	小島遺跡	銅貨	古銅																
32	小島遺跡	銅貨	古銅																
33	小島遺跡	銅貨	古銅																
34	小島遺跡	銅貨	古銅																
35	小島遺跡	銅貨	古銅																
36	小島遺跡	銅貨	古銅																
37	小島遺跡	銅貨	古銅																
38	小島遺跡	銅貨	古銅																
39	小島遺跡	銅貨	古銅																
40	小島遺跡	銅貨	古銅																
41	小島遺跡	銅貨	古銅																
42	小島遺跡	銅貨	古銅																
43	小島遺跡	銅貨	古銅																
44	小島遺跡	銅貨	古銅																
45	小島遺跡	銅貨	古銅																
46	小島遺跡	銅貨	古銅																
47	小島遺跡	銅貨	古銅																
48	小島遺跡	銅貨	古銅																
49	小島遺跡	銅貨	古銅																
50	小島遺跡	銅貨	古銅																
51	小島遺跡	銅貨	古銅																
52	小島遺跡	銅貨	古銅																
53	小島遺跡	銅貨	古銅																
54	小島遺跡	銅貨	古銅																
55	小島遺跡	銅貨	古銅																
56	小島遺跡	銅貨	古銅																
57	小島遺跡	銅貨	古銅																
58	小島遺跡	銅貨	古銅																
59	小島遺跡	銅貨	古銅																
60	小島遺跡	銅貨	古銅																
61	小島遺跡	銅貨	古銅																
62	小島遺跡	銅貨	古銅																
63	小島遺跡	銅貨	古銅																
64	小島遺跡	銅貨	古銅																
65	小島遺跡	銅貨	古銅																
66	小島遺跡	銅貨	古銅																
67	小島遺跡	銅貨	古銅																
68	小島遺跡	銅貨	古銅																
69	小島遺跡	銅貨	古銅																
70	小島遺跡	銅貨	古銅																
71	小島遺跡	銅貨	古銅																
72	小島遺跡	銅貨	古銅																
73	小島遺跡	銅貨	古銅																
74	小島遺跡	銅貨	古銅																
75	小島遺跡	銅貨	古銅																
76	小島遺跡	銅貨	古銅																
77	小島遺跡	銅貨	古銅																
78	小島遺跡	銅貨	古銅																
79	小島遺跡	銅貨	古銅																
80	小島遺跡	銅貨	古銅																
81	小島遺跡	銅貨	古銅																
82	小島遺跡	銅貨	古銅																
83	小島遺跡	銅貨	古銅																
84	小島遺跡	銅貨	古銅																
85	小島遺跡	銅貨	古銅																
86	小島遺跡	銅貨	古銅																
87	小島遺跡	銅貨	古銅																
88	小島遺跡	銅貨	古銅																
89	小島遺跡	銅貨	古銅																
90	小島遺跡	銅貨	古銅																
91	小島遺跡	銅貨	古銅																
92	小島遺跡	銅貨	古銅																
93	小島遺跡	銅貨	古銅																
94	小島遺跡	銅貨	古銅																
95	小島遺跡	銅貨	古銅																
96	小島遺跡	銅貨	古銅																
97	小島遺跡	銅貨	古銅																
98	小島遺跡	銅貨	古銅																
99	小島遺跡	銅貨	古銅																
100	小島遺跡	銅貨	古銅				</												

№15 寺家遺跡（椀荒型3 + 漆器1）、№16 吉崎・次場遺跡（無台盤1 + 墨書）、№20 加茂遺跡5次SK5016（無台皿（瓷器系）2 + 斎串）、№24 戸水C遺跡（無台盤1 + 斎串）、№26 大友西遺跡（有台椀1）、№29 畝田B遺跡（無台皿（瓷器系）1 + 馬形）であり、11世紀の可能性をもつ№26以外は何らかの祭祀行為に伴う可能性が高い。また、各報告書掲載の遺構単位でみた共存遺物は、曲物容器77%、箸状木製品43%、墨書土器65%、木製祭祀具51%となり、いずれも高い共存率を示す。短絡的な結論は避けるべきだが、これら出土例の中に白木地挽物容器の使用や廃棄のパターンが内在する可能性をもち、特に曲物容器、墨書土器との間の強い親近性に注目したい。

出土点数 遺跡単位からみた出土点数は、№19 指江B遺跡・№37 上荒屋遺跡がともに25点と最も多く、№20 加茂遺跡が23点と続く。なお、大量の木製祭祀具の出土から臨海部の「蔵場」とされる№9 小島西遺跡は5点と少なく、使用・廃棄パターンが異なることが予想できる。

3 器形からみた推移

第2図のとおり、器形を整理した。盤144点（うち有台盤2点、荒型9点）、椀19点（うち有台椀4点、荒型4点）、皿（瓷器系）16点、皿（小皿）3点、高台盤2点と、無台盤の出土が圧倒的に多い（第2表）。

各器種の推移は、時期特定の困難さや、生産地、使用期間の長短等の課題が未整理であり、現時点では第4表を示すにとどめたい。県内の挽物容器の出現（生産）は、窯跡出土の須恵器盤類から律令制が整備されつつある8世紀前葉（Ⅲ期後半頃）と考えられ、無台盤を主体に少量の有台盤、椀が確認できる。9世紀後葉に無台盤が主体を維持したまま、新たに皿（瓷器系）が加わり、この状況が10世紀前葉まで続く。また、漆器と共通する新器形の椀（第2図20・26）が、10世紀後半以降に確認できる。樹種は、無台盤はケヤキが70点と最も多く、次いでスギが23点を数える（第2表）。高台盤、皿（瓷器系）、椀はケヤキを主体にトチノキ、ヒノキが用いられ、器種、時期のいずれが主要因か判断できない。

無台盤 有台風を含めて133点を数え、金属製仏器を祖型に須恵器・漆器と互換性をもつ器種である。県内の出現期は、前述のとおり8世紀前葉と考えられ、№15 寺家遺跡B区出土例以外は10世紀前葉までの出土例となる。法量がわかる99点は、口径14～37cm台（16～23cm主体）に分布、複数法量（複合用途）の集合体と評価できる（第5表）。文献にみえる「小盤、中盤、大盤」との関係でいえば、主体となる法量は、「小盤」と「中盤」小サイズに相当する。また、小西昌志氏の器形分類〔金沢市2000〕を参考に、a～gタイプに細分類したが、折衷的な器形も存在する（第2図・第3表）。須恵器無台盤の変遷から、基本的にa・bタイプからd・eタイプを経て、fタイプに主体が推移すると考えるが、使用期間の長短もあり、必ずしも一律的な変化を示さない。

樹種については、能登地域で「大盤」以外のスギ例が多いことは、既に指摘されており〔久田2019〕、今回の集成でも8世紀代から北加賀を南限とする能登地域一帯に確認できる。スギ製無台盤は、f・gタイプを主体に、口径18～31cm台（「中盤」に相当）に分布、加工の制約をもちつつも広く利用されるようだ。また、円孔を穿ったコシキ底板転用例が、№6 三引遺跡、№7 吉田C遺跡で確認できる。

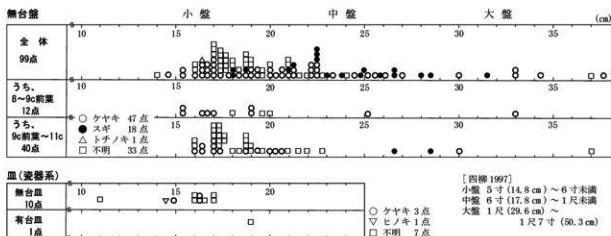
有台盤 №2 真臨遺跡、№37 上荒屋遺跡から各1点が出土する（第2図17・18）。須恵器と互換性をもつ器形であり、器形変化は無台盤に準じよう。口径20～22cmを測る。

高台盤 東海地方の灰軸陶器盤をモデルに、足高の台部をもつ盤である（第2図37・38）。№19 指江B遺跡から2点が出土する（口径14cm・23cm、トチノキ）。須恵器と互換性をもつ器形であり、須恵器

第4表 石川県内の白木地埴物器推移表

時期	無台盤	有台盤	高台盤	無台椀	有台椀	皿(瓷器系)	皿(小皿)
8c前葉	■	■		■	■		
8c中頃	■	■		■	■		
8c後葉～9c初頃	■	■		■	■		■
9c前葉～中頃	■	■	■	■	■	■	■
9c後葉～10c前葉	■	■	■	■	■	■	■
10c中葉～11c前葉	■			■	■	■	
11c中葉				■	■		
	中世Ⅰ						

第5表 石川県内の白木地無台盤、無台皿(瓷器系)の口径分布表



製は9世紀前半の能美窯跡群和気白石窯等で焼成する他、新潟県内の須恵器窯跡でも定量生産することが確認されている。

無台椀 Na 20 加茂遺跡等の11遺跡から15点(荒型含む)が出土、Na 10 出土例は漆器の可能性をもつ。底部台状の器形(第2図21～25)と、11世紀以降につながる器形(同26)に大別できる。前者は、Na 28 柱穴埋納例以外は、9世紀以降に位置付けられる。2法量(口径15cm・19cm台)が存在し、多様な器形から個別生産に近い印象を受ける。樹種は、ケヤキ8点、スギ・トチノキ各1点、不明5点となる(第2表)。

有台椀 Na 2 真臨遺跡2点、Na 26 大友西遺跡・Na 35 三小牛ハバ遺跡各1点と、無台椀とくらべて出土例は少ない。Na 26 出土の有台椀(第2図20、11世紀か)は、口縁部が外反する新しい器形を呈する。樹種不明のNa 35 以外はケヤキとなる。

皿(瓷器系) Na 20 加茂遺跡(6点)、Na 43 浄水寺跡(6点)等の5遺跡から16点(うち有台3点)が出土する。底部厚底の無台皿(第2図31～33)は、台部削り出しを省略したもので、本来、この器形は有台器種と考える。灰軸陶器皿をモデルに、須恵器、土師器、漆器と高い互換性をもつ器形で、須恵器・土師器製皿は県内全域で多量出土する他、漆器製はNa 43 から1点出土する。口径は、11cm前後、15cm弱、16～17cm、19cm(推定)に分布(第5表)するが、基本的に1法量であろう。須恵器製有台皿は、9世紀中頃(VI₁期)に出現、10世紀前葉(VI₂期)に口径が縮小する。樹種は、ケヤキ、モクレン属、ヒノキと種類が多い点の特徴とする(第2表)。

無台皿(小皿) 9世紀～10世紀前葉に、漆器酷似の精製品2点(第2図34・35)と、厚手の粗製品1点(同

36) が出土、器形は斉一性に乏しい。第2図35はトチノキ製、36は針葉樹と報告される。

棊盤 №32 金石本町遺跡から1点が出土する。体部中程に稜を表現し、金属器製高台付盤と似る。

鉢 №25 大友E遺跡から広葉樹製1点が出土する。漆器に類例をもつ精製品である [金子1995]。

荒型 №5下笠師E遺跡、№15 寺家遺跡、№17 杉野屋遺跡で出土、うち№5は官宮工房と目される。

4 まとめにかえて

白木地挽物器の位置付け 古代の小型食器は、列島各地で金属器、木器（漆器・白木地木器）、土器が「写しの関係」をもつ「律令的食器様式」の体系を構築する。この体系は、9世紀以降、各地域で素材特性に応じた転換がそれぞれに進展、11世紀以降の北陸では新たな食器体系（実用器「漆器、磁器」、仮器「土師器皿」）が成立する [国歴史1997]。県内の白木地挽物器は、8世紀前葉～10世紀前葉の律令制が実態をもつ時期に一定レベル以上の多様な遺跡から出土する点に特徴をもち、極めて律令的食器といえる。器種は、

①土器、漆器と互換性の高い器種：無台盤、皿（瓷器系）、（有台盤、高台盤）

②土器と互換性はなく、漆器と互換性をもつ器種：無台碗、有台碗、皿（小皿）

に大別でき、この基本的な原則のもと、各地域で重層的な食器の一部を構成したと考える。①の中で圧倒的に多い無台盤は、能登地方では導入当初からケヤキ・スギ材を用いるようだ。また、簡素な漆下地漆器との関係では、白木地挽物器生産からの展開は想定できず、あくまで漆器生産の技術革新と考える。

白木地無台盤の所有・使用 関根真隆氏 [関根1969] は、無台盤が「木盤」「木佐良」の名で文献に登場、造石山院所用度帳の「木盤玖拾口」を「右役夫料」として用いる事例を示し、下層者の使用頻度の高い食器と推定する。さらに、市での価格は土製片盤と大差ない1・2文で、その用途は副食物を盛り、大型の盤は盛付用、小盤は各自の食用と論ずる。また、東大寺領桑原庄の雑物（天平勝宝7年「越前国使等解」）にある「田筒一百合、木佐良一百口、田坏二百口」は、曲物容器（蓋付）、無台盤、須恵器無台杯を組み合わせた、開墾事業に従事する役夫の食器と解釈される。この中央の給食方法を直接持ち込んだ桑原庄の様相は、東大寺領横江荘である№37上荒屋遺跡の無台盤（口径16～20cm、平均18cm）や多くの曲物容器出土を想起させる。

白木地無台盤と土製無台盤を比較した場合、須恵器製無台盤は南加賀窯跡群で8世紀前葉に出現、定量生産する一方、能登・越中（・越後）では低調な器種である。また、9世紀代の№15寺家遺跡周辺でミガキを加えた酸化焼成の須恵器製無台盤が目立つこと等、北陸の食器様式の中でも、土製無台盤と汎日本的な木製無台盤との間に、所有や使用に関して細地域差・遺跡差が存在する。単なる分布以上の研究の深化が待たれる。

白木地無台盤の使用状況については定見を得ていないが、一定レベル以上の所有者の意図により、実用面（使いやすさ、廉価性・耐久性）と、白木地のもつ非実用面（無垢性）のいずれを重視するかが、今回の集成に現れた多様な使用実態理解の鍵と考える。先述のとおり、県内の白木地挽物器は、漆器以上に、小型曲物容器（筒）、箸状木製品、墨書土器、木製祭祀遺物との共伴例が多く、特に小型曲物容器、墨書土器と高い確率で共伴する。小型曲物容器も、律令制のもとで存在しえた食器と考えており、実用面を重視した場合は、文献に登場するような白木地無台盤と組み合わせた使用となる。一方、非実用面を重視した場合、墨書土器や木製祭祀具と組み合わせて使用・廃棄すると想定できよう。

さらに、今回未検討だが、白木地無台盤、皿（瓷器系）の器面には、内外面とも直線の刃物痕が顕

著に残る例が少なくない。単に組板転用と報告されることが多いが、刃物（短刀か）の所有、調理・食事の場の復元、数十条以上の刃物痕を残すような使用方法・期間の検討が、使用実態を復元する糸口と考える。

本文とはなるが、令和元年度から県内の挽物容器の資料集積を担当した久田正弘、熊谷葉月両氏に深く感謝申し上げます。また、古代の食器を考えるにあたり、箸、匙、調理具を含む土器以外の食器の集積、研究が重要な位置を占める。本報告がその一助にでもなれば望外の幸せである。

引用・参考文献（県内の挽物容器出土遺跡は、資料集文献を参照。）

- 金子裕之 1995「8・9世紀の漆器－身分表示の食器－」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版
- 川畑 誠 1994「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究 第4号』北陸古代土器研究会
- 小西昌志他 2000「石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅳ」金沢市教育委員会
- 国立歴史民俗博物館 1997「国立歴史民俗博物館研究報告 第71集 中世食文化の基礎的研究」
- 品田高志 1997「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究 第7号』北陸古代土器研究会
- シンポジウム実行委員会 1990「シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」シンポジウム実行委員会
- 関根真隆 1969「奈良朝食生活の研究」吉川弘文堂
- 田嶋明人他 1996『月刊考古学ジャーナル No.404』ニュー・サイエンス社
- 久田正弘 2019「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報 第41号』（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 北陸古代土器研究会 1994『北陸古代土器研究 第4号』
- 北陸中世土器研究会 1992「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」、1995「中世北陸の木製容器」、1997「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」
- 埋蔵文化財研究会 1996「古代の木製食器」第39回埋蔵文化財研究会集第1・2分冊
- 山田昌久・伊藤隆夫 2012「木の考古学 出土木製品用材データベース」海青社
- 四柳嘉章 1991「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌 第34号』石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1992「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌 第35号』同上
- 四柳嘉章 1997「概説北陸の漆器考古学－中世とその前後－」『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』北陸中世土器研究会

石川県内の挽物漆器について

向井裕知（金沢市埋蔵文化財センター）

北陸の漆器研究は、四柳嘉章氏の研究によるところが大きい。その成果に基づきつつ、律令的漆器生産から中世の漆器生産への転換過程を、県内出土の考古資料から読み取ってみたい。形態、製作技法のほか、とりわけ北陸においては四柳氏による塗膜分析が多く実施されており、漆下地から渋下地への転換時期などは分析結果から導かれている。

古代漆器出土の遺跡は34遺跡、83点を数える。器種としては、有台椀18点、小皿16点、無台椀15点、無台盤12点と椀類が多く、希少品として稜椀、合子椀、小壺、高杯、筒型容器がある。出土時期は、10世紀頃までには39点が出土しているが、11世紀以降は44点出土しており、古代末に出土量が増加する。以下に年代ごとに代表的な出土品について紹介し、古代から中世にかけての挽物漆器について概観する。

1 出現期の挽物漆器

漆器の場合、共伴遺物から年代を導くことが多く、時期を特定することが難しい場合が多いが、7世紀台の挽物漆器の確実な事例は現段階では未確認である。8世紀前半頃の可能性があるものとして、金沢市畝田・寺中遺跡の無台椀がある。8世紀中頃～後半の盤が金沢市三小牛ハバ遺跡で出土しており、布着せを施した地の粉漆下地で複数の黒色漆層が確認される優品である。小松市松梨遺跡では8世紀後半から9世紀前半の筒型容器が出土している。内外面共に地の粉漆下地、漆層、黒色漆層が確認でき、縦木取りの広葉樹を用いている。他に、年代幅は広いが金沢市中屋サワ遺跡からはツバキ属の小壺が出土するなど多様な器種が確認できる。

2 古代前半の挽物漆器

概ね9・10世紀代を扱う。

羽咋市寺家遺跡では9世紀前半の盤が出土している。布着せ、地の粉漆層に7層の漆層が確認できる非常に丁寧な作られた優品で、横木取りのケヤキを用いる。金沢市戸水大西遺跡からは8世紀末から9世紀末の稜椀や高杯、合子、無台盤が出土している。稜椀は漆下地に複数の漆層が確認できる。また挽物ではないが、漆革箱が出土している。下塗・中塗は省略されているというが、複数層の漆層が確認できるものである。かほく市指江B遺跡から9世紀後半から末の銅製品を模倣したような無台椀の優品が出土している。横木取りのケヤキを用い、布着せ、漆下地、複数の漆層が確認できる。

戸水大西遺跡出土の高杯や津幡町加茂遺跡出土の有台椀、羽咋市四柳白山下遺跡出土の大型底部(壺か)はピットや土坑への埋納に用いられており、漆器利用の一面を示している。

樹種については、同定がされているもののみを観察にはなるが、基本的にはケヤキが採用されており、例外的にヒノキ（小松市浄水寺遺跡）やトチノキ（金沢市大友E遺跡、同大友西遺跡）などの外来・在地材が少数ながら確認できる。

3 古代後半の挽物漆器

概ね11・12世紀代を扱う。

確実に11世紀代に比定できるものは少ない。金沢市畝田ナベタ遺跡で11世紀前半のケヤキを用い

た無台皿が出土している。金沢市畝田・寺中遺跡からは11世紀末～12世紀代の有台・無台碗が出土している。樹種はケヤキ5点、トチノキ5点、スギ1点と多様である。

12世紀代になると、渋下地漆器や赤色漆塗り漆器が登場する。

12世紀後半の加賀市田尻シンペイダシ遺跡出土の小皿は、炭粉渋下地に黒色漆を塗布した製品である。また同遺構では内面赤色漆を塗布した小皿も共存している。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる七尾市オカ遺跡や穴水町西川島遺跡群御館遺跡では、炭粉渋下地を用いた有台碗や有台鉢が出土している。

赤色漆塗り製品については、12世紀後半の珠洲市柏原ミツハシ遺跡出土のトネリコ属を用いた小皿、先の田尻シンペイダシ遺跡出土小皿、13世紀代かとされている中能登町久江サザミヤシキ遺跡出土のブナ属の有台碗がある。なお、黒色漆塗りに赤色漆による漆絵を描くものは13世紀代には出現している。

4 古代から中世の挽物漆器

古代から中世にかけての変化を以下にまとめる。

器種については、古代前半は盤や碗が多く、他に壺や筒型容器、高杯などの特殊器種もみられる。後半になると、碗は定量みられるが、新器種として小皿や無台皿が登場し、12世紀以降は定量を占めるようになる。当該時期は土器編年においても、ロクロ土師器皿からすくね土師器皿へと製法が変化していくが、器形としては小皿が主体となってくる時期に該当し、食器の使われ方による変化といえる。

樹種については、古代前半にはケヤキを主体とするが、後半にはケヤキの他、トチノキやブナ属などが定量占めるようになり、複数の樹種が選択されるようになる。

渋下地製品の登場は漆器の大量生産を可能とし、普段使いの器として漆器が用いられるようになったことを示しているとされるが、加賀・能登においては12世紀代には確実に登場するようである。ただし、越後では上越市一之口遺跡で10世紀末から11世紀初頭の製品で渋下地漆器がみられるため、加賀・能登においても、11世紀代には出現していた可能性が高い。

また、外面は黒色漆塗りだが、内面を赤色漆塗りする漆器も12世紀には登場する。限られた遺跡からの出土であることから、広範に流通するわけではない。

おわりに

遅くとも12世紀代には渋下地漆器が登場し、定量占めるようになる。13世紀代に入ると、さらに渋下地漆器が増加すると考えられるが、赤色漆絵による優品が登場し、館等の有力者の元に供給されるようである。

今回は挽物漆器製品の動向のみ取り扱ったが、考古学で扱う食器の大半を占める土器・陶磁器の動向と併せて考える必要があり、今後の課題としたい。

なお、今回の研究集会では、四柳嘉章氏の研究によるところが非常に多く、大いに参考にさせていただくと共に、科学分析の重要性を再認識した。また、挽物漆器の集成及び図表の作成は、石川県埋蔵文化財センターの川畑誠氏、久田正弘氏、熊谷葉月氏によるものであり、深く感謝申し上げます。

古代越前・若狭における挽物容器の集成

松本 泰典（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

1996年の埋蔵文化財研究集會では、古代の木製食器と題して、北陸地方や福井県も含む全国的な集成と研究発表が行われた（本多1996・川端1996ほか）。この集成から四半世紀経過したが、福井県内では大幅な資料増加もなく、他県と比べれば当該期の資料が不足していることは否めない。今回は上記で集成された資料に新出資料を加えることによって、現在の資料の様相を少しでも概観したい。

2 遺跡の性格と資料の概要

あわら市細呂木阪東山遺跡では、2014年に福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）で発掘調査を行い、「津家」と墨書された須恵器などにより、付近に公的施設や港湾施設があると推定されている。2区からは、無高台の小形品（7）や中形品（8,10,13）があり、有高台の小形品（14・15）もある。無台盤の多くは、口縁部が底部から斜方にそのまま立ち上がるが、13は底部側縁に括れを持つ。これらは8・9世紀代のものである。1区の漆器碗は、内面赤色漆である2以外は総黒色漆である。胴部は丸みを帯びており高台が低いものが多い（2～5）。これらの多くが横木取りである。

福井市今市岩畑遺跡では、1993年に県埋文で発掘調査を行い、多数の掘立柱建物や手工業生産に関わる遺物を確認している。地域の有力者が農業生産をはじめとする多角的経営を行うための拠点と考えられている。出土した盤は、共存する須恵器から8世紀代と考えている（19）。

鯖江市光源寺遺跡は、越前国府推定地である旧武生市街地付近に立地する。1993年に県埋文で発掘調査を行い、寺院を示す墨書土器が出土している。出土した盤は9・10世紀代のものである（20）。

越前市安丸官人遺跡では、2008・09年に県埋文で発掘調査を行い、風寺硯などの遺物により古代国府に関連する遺跡と推定されている。21・22は外底面を除いた総黒色の碗で22は総高台である。

大野市太田・小矢戸遺跡では、2007～10年に県埋文で発掘調査を行い、掘立柱建物や緑釉陶器などにより、大野郡資母郷における公的施設を有する拠点の集落と考えられている。24・25は外底面を除いた総黒色漆で、塗膜断面観察で炭粉渋下地を検出している。24は総高台で口縁部は外反気味である。

若狭町田名遺跡と角谷遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物や畦畔溝構、矢板配列溝構を検出している（三方町教委の発掘調査）。8・9世紀の遺物包含層から無高台の盤が出土する（26～28）。

3 まとめ

遺跡の性格と挽物との関係のみをみると、公的施設をもつ遺跡や有力者の生産・物流拠点における検出率が多い。居住用建物のみを持つような一般的な集落では、挽物をほとんど確認できなかった。

資料全体でみると、8・9世紀代の資料、特に盤が多いことが分かった。その中でも細呂木阪東山2区では、小形品や中形品、無高台や有高台といった複数種の挽物が認められる（ただし、16は別物、17は中世末から近世、18は盤・皿の可能性）。これらは福井県内でも数少ない8・9世紀代のまとまった資料として注目している。そのほかに、安丸官人や太田・小矢戸の21・22、24・25は、口縁部を外反気味に、底部を総高台に成形し、外底面を除いた内外面に黒色漆で仕上げている。これらの碗については、その特徴から10・11世紀に位置づけられる（環日本海交流史調査研究集會の当日討論で

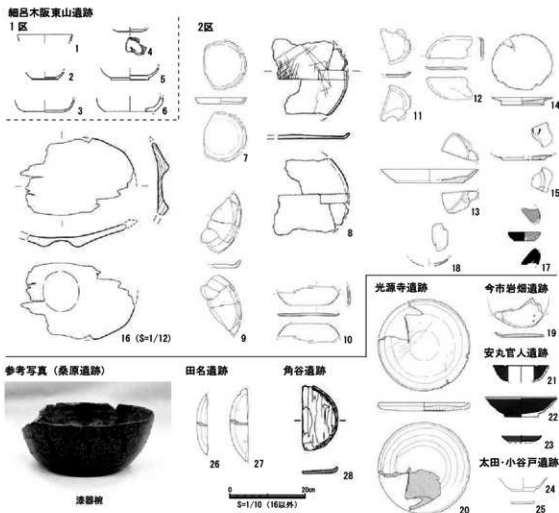
ご教示)。また、24からは普及漆器の指標である炭粉沈下地を検出しており、これらの10・11世紀代の漆器は、中世漆器の初まりを考える上でも重要な資料といえる。また、細呂木阪東山1区の事例の低い高台は内面を抉り出すようにして作出される。前出の安丸官人や太田・小矢戸の高台形状とは明らかに異なるため、10・11世紀代よりも後出する時期のものと考えられる。以上の挽物の樹種については、報告書の樹種分析や肉眼観察により、その多くがケヤキと考えている。あわら市桑原遺跡(1977年に金津町教委が発掘調査)では、共伴土器のあり方から8世紀後半と報告された漆器碗が井戸から出土している(参考写真)。一方で、本資料はスタンプ紋様や細呂木阪東山1区に類似する高台形状を持ち、小松市佐々木アサバタケ遺跡の中世前期の井戸から出土した漆器碗に類似している。このため、本資料の時期は古代というよりも中・近世、または中世前期(13世紀代)を想定しておきたい。

引用・参考文献

川畑 誠 1996「北陸地方の木製食器の概要」『第39回埋蔵文化財研究会 古代の木製食器-弥生期から平安期にかけての木製食器-』(第1分冊 発表要旨)

本多達哉 1996「福井県」『同上』(第2分冊 北海道・東北・関東・中部)

※掲載遺跡の引用文献については頁数の関係上割愛した。また、桑原遺跡の資料実見および写真掲載には、あわら市郷土歴史資料館からご協力・ご提供をいただいた。



福井県内から出土した挽物関係遺物の集成図

古代越中の挽物容器

朝田亜紀子（富山県埋蔵文化財センター）

富山県の古代の挽物容器は、現在 16 遺跡において 62 点が出土している。このうち報告書等に示されている 58 点の遺物実測図を転載した。

富山県内では、挽物容器の 7 世紀代の出土例はみられない。8 世紀頃から列物に挽物が加わるようである。挽物の器種には、蓋、杯、碗、皿（盤）、高杯があり、須恵器や埴器の器形を模倣したのもみられる。どの器種も白木製を基本とし、9 世紀頃までは皿（盤）が多い傾向にある。樹種はケヤキが多いようであるが、樹種同定を実施していないか報告書に記載のないものも多く、詳細は不明である。この時期の挽物は律令祭祀が行われた川や溝からの出土に限られ、一般村落から出土する事例はない。祭祀具に挽物容器が含まれていたと推測できる余地もあるが、明確ではない。一般村落から挽物が出土するのは 10 世紀後半以降となり、中世の食器様式への変革が進んだことを示す。

引用・参考文献

池野正男 2011 「古代食器の中の木製品」『大塊』第 29 号 富山考古学会

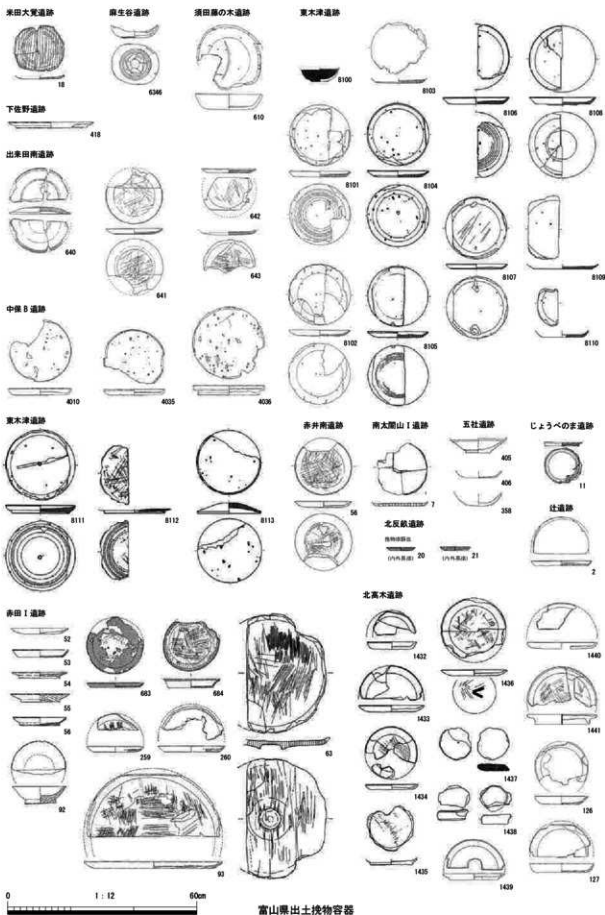
宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－」『第 39 回埋蔵文化財研究会 古代の木製食器』

岡本淳一郎 1996 「富山県の概要」『第 39 回埋蔵文化財研究会 古代の木製食器』埋蔵文化財研究会

古代越中の挽物出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	出土遺構	出土物種	特記事項	報告書等（報告書に示す）
大田大塚遺跡	郡川郡 郡川町	9C 末～10C 前期前半 (10C 前期前半)	井戸 (D6/S64)	皿 (16)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県教育委員会 2006 富山県大田大塚遺跡発掘調査報告書
藤生山遺跡	富山県富山郡 川人町 藤生山町内	平安時代	井戸 (平安時代 埋蔵施設 北 2001)	杯 (434)	須恵器出土	富山県教育委員会 1997 藤生山遺跡－藤生山町内 藤生山町内発掘調査報告書
下野野遺跡	野沢、池木、野沢の集落跡	古代～中世前期	自然発露 (B-C 地区 S2001)	碗物	人形、須恵器、埴物の土器出土。溝に連続して出土。須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
須田原の本遺跡	富山県富山郡 田中町 須田原	9C 中頃～9C 代	埋蔵物、遺物付倉庫	皿 (141)、蓋 (7)、高脚杯 (5)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
出来田南遺跡	中野町 出来田南	9C 中頃～9C 後半	大塚	皿 (440)、蓋 (64) (441)～(443)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
中塚の遺跡	富山県富山郡 田中町 中塚	9C 中頃～9C 後半	自然発露 (S2011) 埋蔵物 (S2012) 埋蔵物 (S2013)	皿 (4010) 4033 4036	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
根本津遺跡	野沢、村木野内集落跡、村木野内集落	9C 後半～9C 後半	溝 (西側埋蔵施設 S046)	皿 (1811)～(1812) (1813)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
赤井南遺跡	野沢、遠野見立点付近の集落	9C 後半～9C	溝 (赤井南側埋蔵施設 S010)	皿 (191)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
赤井 1 遺跡	特中集落	9C～10C 前期	溝 (3・4 地区 S001)	皿 (191)～(194)、高脚杯 (43)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
赤井 2 遺跡	特中集落	9C 後半～9C 後半	溝 (18 地区 S001)	皿 (195)～(198)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
赤井 3 遺跡	特中集落	9C 後半～9C 後半	溝 (19 地区 S001)	皿 (199)～(200)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
北本高木遺跡	越中郡越前町の集落跡	9C 末～9C 初	溝 (北地区 D・D1)、川跡 (C 地区 S278～190)	皿 (1432)～(1441)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
南大田山 1 遺跡	結太の集落	9C 後半～9C 後半	溝 (南地区 S001)	皿 (191)～(194)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
五反田遺跡	高野	10C 後半	土坑、溝	皿 (408)、高脚杯 (405)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
比津遺跡	野沢 (富野の集落)	9C 末	自然発露 (S2020)	蓋 (289)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」
C3・3-4 の本遺跡	野沢 (池田の集落)	9C	埋蔵物	皿 (11)	須恵器、埴物、反物、石手、高脚杯、蓋型土器出土	富山県埋蔵文化財センター 2011 「富山県高野町下野野遺跡発掘調査報告書」

計 16 遺跡 62 点 (うち 4 点は銅製)



新潟県（越後国）の挽物製品について

水澤幸一（新潟県胎内市役所）

はじめに

県内の主な挽物出土遺跡として、中越の八幡林遺跡で約40点、箕輪遺跡で約100点、下越阿賀北の清水潟北岸一帯の遺跡群で約200点（船戸桜田遺跡100点、船戸川崎遺跡30点、青田遺跡16点、中倉遺跡14点、草野遺跡13点、屋敷遺跡10点、蔵ノ坪遺跡8点等）が出土している。その他、新発田市・阿賀野市・加茂市・新潟市等下越の低湿地遺跡からの出土も認められ、県内全体では350点以上となる。ほとんどが河川跡からの出土である。なお、なぜか国府所在地の上越では、ほとんど報告されていない。

以下、以前に行った研究（水澤2002・2007・2020）をもとにみていく。

8～10世紀の挽物製品

挽物の種類は、有台盤・無台盤・椀・鉢・鉢・蓋等で、有台盤・無台盤・椀等の漆器が、全体の1割ほどを占めている。無台盤が6割以上を占め、有台盤を合わせると9割近くとなる。

まず、器種分類を行い、その帰属年代を示す。年代は、図9（春日1999）に準ずる。

(1) 白木製品

無台盤（図1）最も出土点数が多い。Ⅰ類～Ⅵ類に分類した。

Ⅰ類 体部の立ち上がりがわずかなタイプ。口径25cm以上の大きなものが多い。Ⅲ～Ⅴ2期頃まで。

Ⅱ類 体部が屈曲し、底部との境が明瞭なもの。Ⅴ類に次いで多い。Ⅳ2～Ⅴ2期。

Ⅲ類 体部外面中位の削りの角度を変えるため、体部が屈曲するもの。Ⅴ1～Ⅴ2期。

Ⅳ類 Ⅲ類と反対に、体部内面中位に屈曲をもつもの。Ⅲ類よりは多い。Ⅴ2～Ⅵ2期。

Ⅴ類 体部が外へ開くタイプ。底部と体部の境が丸みをもつものが多い。最も出土例が多い。Ⅰ類の発展形態で、Ⅴ1期から認められるが、Ⅱ類が衰えるⅥ1期以降主体となる。Ⅵ3期まで認められる。

Ⅵ類 体部の屈曲が強く、器高が3cm以上と深いタイプ。類例は少ない。Ⅴ2～Ⅵ1期。

有台盤（図2）形態差が著しい。Ⅰ類～Ⅹ類に分類した。

Ⅰ類 体部の立ち上がりがほとんどなく、短いもの。無台盤Ⅰ類に対応するものである。Ⅳ1～Ⅳ2期。

Ⅱ類 無台盤に最も近いが、側よりの削り込みが認められ、高台を意識したと考えられるもの。いわゆる総高台である。内列りは、ほとんど認められない。多くのバリエーションがある。Ⅳ3～Ⅵ1期。

Ⅲ類 無台盤Ⅳ類に側から削り込みを入れたもの。器高は、5cm近くある。Ⅴ2期。

Ⅳ類 明確に低い高台を削り出すもの。Ⅳ2～Ⅵ1期。

Ⅴ類 太く高めの高台に、屈曲して短く立ち上がる体部がつくもの。Ⅳ3～Ⅴ2期。

Ⅵ類 Ⅴ類に近いが、底部を厚く（2.5cm）削り残し、器高がやや高いもの。Ⅴ2期。

Ⅶ類 Ⅱ類の底部に高く太い高台が付されたもの。Ⅵ1期か。

Ⅷ類 細く高い脚部がつくもの。体部は屈曲する。口径の大きいものが多い。Ⅳ3～Ⅴ2期。

Ⅹ類 体部が水平ぎみに開くもの。底部は、総高台状を呈するものが多い。体部が短いものと、比

較的長いものがある。X類とともに最も新しく現れてくる器形である。VI 2～VI 3期。

X類 水平に短く開く体部に、厚い底部がつくもの。VI 3期。

蓋(図3) I～III類に分類した。他に壺類に伴う小型蓋がある。

I類 つまみが輪状で、端部を折り曲げる形状のもの。IV 1期。

II類 つまみが擬宝珠形で、端部を折り曲げる形状のもの。V 2期。

III類 つまみが肥大化した擬宝珠形で、端部内面に段(かえり)を有するもの。V 2～VI 1期。

棧椀(図3) 総高台ぎみの高台から体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外面をえぐって体部中位に棧をつけたもの。V 2期。蓋III類と組になるものと思われる。なお、より端部を外反させたものが、船戸川崎遺跡の南方2km弱の新発田市青田遺跡の川跡より出土している。

小椀(図3) 口径12cm前後を測る小型椀で、総高台の底部が斜に開くもの。口縁端部内面に、やや丸みをもたせている。VI 2～VI 3期。

椀(図3) 総高台ぎみの底部から体部が直線的に斜に開く。口縁は、直に取めるものと端反りがある。米沢市古志田東遺跡(手塚2001)では、口縁端部が外反ぎみのものが多くを占めている。IV期からみられ、VI期以降は端反りタイプのもが主体となり、11世紀代まで続く。

無台杯(図3) 漆器杯I類に対応するもの。V 2期。

有台杯(図3) 底部を低く削り出し、体部が直に立ち上がるもの。口径は、10cm前後。VI期。

鉢(図3) 無台で体部が大きく開くものと、有台で端反りのものがある。口径25cm前後。V 2期～VI期。

(2) 漆器(図3、壺を除く)

漆器無台盤

I類 無台盤I類・II類に薄く漆を塗ったもの。III～V期。NA3(289)は、丁寧なつくりである。

II類 胎が非常に薄く、厚めの漆をかけるもの。身は深く、斜に開く。VI 3期、10世紀に入る。

漆器有台盤 有台盤IV類に薄く漆をかけたもの。IV 3期。

漆器皿 浅身で、口縁が反りぎみに開き、小ぶりの高台が付く。VI 3期。

漆器杯

I類 胎が全体に薄く、体部が内湾ぎみに開く。内面のロクロ目が顕著である。V 2期。

II類 底部が厚く、体部が直に開く。I類を在地で写したものと思われる。V 2期。

漆器椀 総高台ぎみの底部から体部が直に開き、端部を反りぎみに取めるもの。VI 2期。

壺(図6) 八幡林遺跡でのみの出土である。IV 1期。

なお外に、鞍の漆器片が船戸川崎遺跡4次調査で出土している。

(3) 各器種の消長

次いで、上記分類器種の消長を示す(図4)。ここから知られることは、8世紀後半のIV 2期に入る頃から器種が多様化し、それがピークに達するのが9世紀前半のV 2期を前後する時期で、VI期以降盤が減少し、椀がめだててくるのがわかる。この多様化し始める段階は、越後国北辺において爆発的に遺跡数が増加する時期であり、官衙的な遺跡が各地で認められてくる時期である。そして挽物製品は、それら官衙でのみ必要とされ、生産された器物であるといえる(中村2002、水澤2005)。

文字資料からみると、船戸桜田・船戸川崎遺跡では、「木」の墨書土器とともに前者では「木」の焼印が押された盤が2点出土している。また、「麻績部」(木簡:FS2)の存在は、信濃や上野等の越後国外からの移住者を表しているように、それに「三宅」(墨書須臾器:FS4)や「守部」(木簡:FK4)といった在地の富豪層や、国司の「少目」(木簡:蔵ノ坪遺跡、新潟県教委2002)がかかわ

ていることから、この時期にかなりの移住者（開拓者）があったことが想定される。それは、この時期にいたって、不毛の湿地帯が水運による交通体系の整備によって新生したということができよう（水澤 2005）。

（4）無台盤と有台盤の時期的な口径の推移

図5は、両者の口径（mm単位切り捨て）を表に落としたものである。なお、口径が不明なものは、高台径に2cmを足した数値で記してある。また、出土点数が非常に多い船戸桜田2次調査のみは、1～3段階とその外の4つに分けて示してある。

一見してわかるのは、VI1期以降の所産であるFS2の3段階、FS4・5、FK2で口径24cmを超えるものが出土しておらず、VI2期には口径20cmに満たないものがほとんどを占めるということである。前段階のV1～V2期では、20～23cm台の製品が中心であり、時期を遡るごとに口径が大きいものが中心となる。IV1期の八幡林遺跡H地区例（和島村教委 1994）では、図示された8点中6点が口径25cmを越えている。

それらは、畿内でも認められるところであり（町田・上原編 1985）、全国的な変化である可能性が高い。ただし、提示された畿内の資料は、8世紀後半の資料群（平城京・長岡京）のみであるため、その時期にあたる大型品がほとんどを占めている。また、「皿か」とされた平城宮出土の2513は、蓋I類と思われる。

次いで、7世紀末～8世紀前半代とされる山形県東置賜郡高畠町の大在家遺跡出土挽物では、有台器種の占める割合が高く、口径20cm前後のものが多かった。また、漆器も有台盤・無台盤が各1点以上出土している（高畠町教育委員会 1998～2001、実見）。

以上の様相をふまえて再度まとめると、盤の口径の変化は、土器のそれに連動している可能性が高いものと思われる。IV1期の八幡林遺跡H地区例（和島村教委 1994）では、口径25cmを超えるものが多く、V1～V2期では、20～23cm台の製品が中心となり、VI2期以降口径24cmを超えるものが出土していない。そしてVI3期以降は、庄内の上高田遺跡（山形県埋文 1995・1998）や興屋川原遺跡（山形県埋文 2010）、古志田東遺跡（米沢市教委 2001）、弘田柵関連の厨川谷地遺跡（秋田県教委 2005）にみられるように有台盤Ⅸ・Ⅹ類や碗が中心となっていく。

したがって、8世紀代に入り、土器様式に連動して木盤も口径を上げ、9世紀には小型化していくことがわかる。それは直接的には、盤の上に数点の食器（土器）が置かれたことを意味しよう（その点、仲田茂司氏の復元想定された食膳における使用形態（仲田 1993）とは異なる）。すなわち木盤は、後代の折敷に相当する器種であり、その出現・普及に伴い、消えていったものと考えられる。したがって同じ挽物でも、10世紀後半以降に普及してくる漆器碗類（水澤 2007）とは、性格を異にする器種であると考えられる。

なお、11世紀以降の漆器については、当日資料及び図7・8を参照のこと。

小 結

以上、越後の8世紀から10世紀までの挽物製品を中心に概観してきた。

奈良～平安前期の主な器種である木盤は、土製食器を置く台であり、その役割は後代の折敷に引き継がれていった。また、漆塗りの盆もその後継である。

そして、10世紀以降に増加してくる碗・皿類は、11世紀以降漆器が主体となり、食膳具の主體的役割を（日本海沿岸地域では貿易陶磁とともに、それ以外の西日本では土器に組み合わせられて）担うようになっていったと考えられる。

参考文献

- 秋田県教育委員会 2005『厨川谷地遺跡』県文化財調査報告383
- 飯塚武司 2000『古代手工業生産における木工』『考古学研究』47-3
- 宇野隆夫 1996『木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－』『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』第39回埋蔵文化財研究集会資料、石川
- 春日真実 1996『新潟県の概要』『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会資料
- 春日真実 1999『土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2000『古代・中世における挽物・曲物の変遷』『大武遺跡（中世編）』新潟県埋文調査報告97
- 春日真実 2001『柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年の位置』『新潟考古学談話会会報』第23号
- 川畑 誠 1994『石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書』『北陸古代土器研究』第4号、石川
- 川畑 誠 1996『北陸地方の木製食器の概要』『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会資料
- 川畑 誠 1997『木製食器からみた9世紀』『北陸古代土器研究』第6号、石川
- 品田高志 1997『北陸における古代と中世の木製食器』『北陸古代土器研究』第7号、石川
- 高畠町教育委員会 1998～2001『文化財年報』vol.2～5
- 中条町教育委員会 1997『下町・坊城遺跡Ⅱ～川跡出土の遺物～』町埋蔵文化財調査報告第12集
- 中条町教育委員会 1999『中倉遺跡3次』町埋蔵文化財調査報告第16集、新潟
- 中条町教育委員会 2001『船戸桜田遺跡2次』町埋蔵文化財調査報告第22集
- 中条町教育委員会 2001『下町・坊城遺跡V（C地点・総論編）』
- 中条町教育委員会 2002『船戸川崎遺跡4次』町埋蔵文化財調査報告第24集
- 中条町教育委員会 2002『船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』町埋蔵文化財調査報告第25集
- 仲田茂司 1993『東国古代の挽物－食膳における土器との補完形－』『考古学研究』39-4
- 仲田茂司 1999『東国中世の漆器』『考古学研究』46-1
- 中村 弘 2002『袴狭遺跡出土木皿の検討』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号
- 新潟県教育委員会ほか 2002『蔵ノ坪遺跡』県埋文調査報告115
- 新潟県教育委員会ほか 2003『蒲淵遺跡』県埋文調査報告126
- 新潟県教育委員会ほか 2004『青田遺跡』県埋文調査報告133
- 新潟県教育委員会ほか 2006『大坪遺跡』県埋文調査報告153
- 新潟県教育委員会ほか 2006『住吉遺跡』県埋文調査報告157
- 新潟県教育委員会ほか 2015『箕輪遺跡Ⅱ』県埋文調査報告254
- 新潟市教育委員会 1993（2000）『新潟市の場遺跡』
- 町田章・上原真人編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊
- 水澤幸一 2001『折縁坏とその背景』『新潟考古学談話会会報』第23号
- 水澤幸一 2002『古代の挽物製品について』『船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』中条町埋文報告25
- 水澤幸一 2005『潟街道の遺跡群』『古代の越後と佐渡』高志書院
- 水澤幸一 2007『越後の中世漆器』『新潟考古』第18号
- 水澤幸一 2009『日本海流通の考古学－中世武士団の消費生活』高志書院
- 水澤幸一 2011『北辺にとどまるモノと越境するモノ』『古代・中世の境界意識と文化交流』勉誠出版
- 水澤幸一 2020『古代 木製容器』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 山形県埋蔵文化財センター 1995『上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書』調査報告書第25集
- 山形県埋蔵文化財センター 1998『上高田遺跡第2・3次発掘調査報告書』調査報告書第57集
- 山形県埋蔵文化財センター 2010『興屋川原遺跡』県埋文調査報告187
- 四柳嘉章 1997『北陸の漆器概説』『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』第1分冊、第10回北陸中世土器研究会資料
- 米沢市教育委員会 2001『古志田東遺跡』市埋文調査報告73
- 和島村教育委員会 1992～1994『八幡林遺跡』埋蔵文化財調査報告第1～3集、新潟

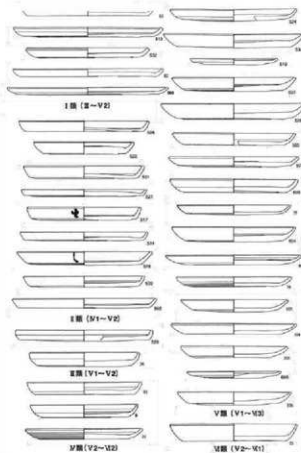


図1 無台盤の分類



図2 有台盤の分類

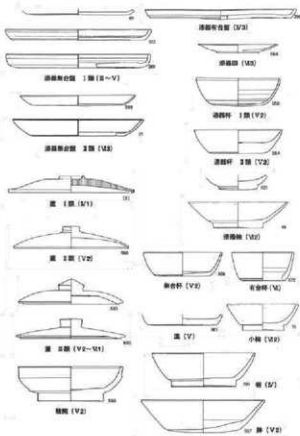


図3 漆器、蓋・椀等の分類

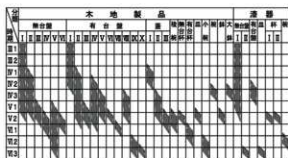


図4 換物消長表

品名	船戸船内 2次			船戸船内 船戸船内 船戸船内 船戸船内						中船 2次		
	1次	2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	9次	10次	11次	
大												
中												
小												

図5 盤口径分布

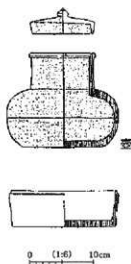


図6 八幡林遺跡出土土器

本誌	年代など	春日1999		
1 段階	1古		I.1	
	1新	飛鳥I	I.2	
	2		I.3	
	3	橋子谷聖跡	II.1	
	4	—	II.2	
2 段階	5	—	III.1	
	6	下ノ西SD25 鎌倉寺SD1700	神龜五年(725) 天平八年(736)	IV.1
	7	磯子7号聖跡 今池SD102	西暦773年上段 恋C(長岡京)	IV.2 IV.3
	8	—		V.1 V.2
	9	須石河川 興福寺K66	天安元~貞觀元年 (857~859) 貞觀五年(863)年	VI.1
3 段階	10	馬越SE14	元慶(877~885)	VI.2 VI.3
	11	—	O-53	VI.1
	12	門前SD132	延長五年(928)	VI.2
	13	—		
	14	之口東SD1	長石	VI.3
15古	—		VI.4	

図9 時期区分(春日2010を改変)

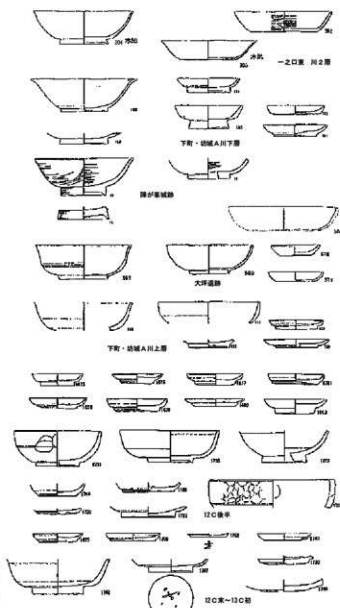


図7 下町・坊城遺跡C地点漆器変遷
(12世紀後半~13世紀初頭)

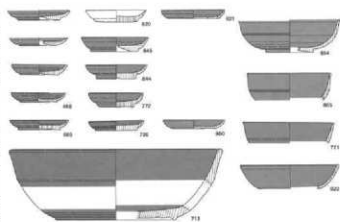


図8 住吉遺跡出土土器(13世紀前半)

資料検討会

当センター収蔵の、羽中市四柳ミツコ遺跡、かほく市指江B遺跡、金沢市畝田・寺中遺跡などの出土資料を前に、資料検討会を行った。その殆どは、センター職員でも普段は目にする事のない、保存処理済みの貴重な資料であった。講師の方々、並びに参加者共々、実物を手に限られた時間を惜しんで活発な意見交換が行われた。



資料検討会の様子 1



資料検討会の様子 2



資料検討会の様子 3



資料検討会の様子 4

通常であれば1日目に集会、2日目に資料検討会を実施するところを、残念ながら今回はこれらを圧縮して1日で実施する強行軍となったが、時間の制約を受けたことによる反動か、例年になく密度の濃い充実した集会となった。講師の方々のご尽力及び関係機関の多大なるご配慮・協力があってこそその開催実現・成果であったと、改めて感謝を申し上げる次第である。

石川県珠洲市宇治役場裏遺跡における古代土器製塩の研究

～能登半島の製塩遺跡における堆積物の検討～

阿部芳郎（明治大学文学部）・久田正弘

要 旨

古代の北陸地域における塩作りは、若狭地方を中心とした大規模な塩業体制が構築され、都に塩を供出する一大塩業地域が存在することが平城京から出土した木簡には若狭の地名が記載されていることから類推されている。日本海側にある古代製塩遺跡の分布は若狭から能登半島の沿岸部にまで及び、この地域の海岸部には多数の製塩遺跡が残されている事実があるが、製塩土器の形態学的な編年が進められてきたものの、ここまで具体的な塩の結晶化に伴う技術については想像の域を出るものではなく、具体的な証拠がないため不明とされてきた。

本論は能登半島先端部にある宇治役場裏遺跡の製塩址から採取された堆積物の分析をおこない、海草付着性の微小生物の化石を検出した。その結果、海草を焼いた灰を結晶媒体として用いた製塩技術で製塩が行われていたことが明らかになった。

キーワード 土器製塩 製塩遺跡 古代 珪藻分析 海草付着性微小生物

はじめに

塩田出現以前の古代の製塩研究は、製塩土器の研究と製塩遺構の研究が進められ、古代北陸地域、わけても若狭における古代塩業の存在が指摘されて久しい（近藤 1994）。製塩土器の形態変化と製塩炉の形態などの議論が進められ、同時に平城京出土の塩札とされる木簡に若狭地域の地名が見られることなどから、都に塩を送る一大流通基点が北陸に存在したという指摘もある（馬場 2013）。

一方で、具体的な塩の生産技術については、製塩土器の型式学的な研究に蓄積があるものの、塩を結晶化させる技術の解明は、類推にともなう実演が行われつつも、イメージの拡張とは裏腹に具体的な分析をともなう研究は殆んどなされていない。塩づくり用に用いた材料は土器以外にも存在したに違いないが、それを評価する方法は、土器の付着物や製塩址の堆積物の分析が有効であることを筆者らは製塩遺跡の堆積物の分析から明らかにしてきた（阿部ほか 2013）。

とくに近年筆者らが進めている遺跡内の灰や土壌などの堆積物の分析では、縄文時代から古代の製塩において焼いた海草の灰が利用された事実を明らかにしている（阿部ほか前掲）。本論は 2003 年に報告された宇治役場裏遺跡の発掘調査において採取された製塩址の堆積物の分析をおこなうことによって、現状で課題とされている北陸地域における古代の製塩技術について検討したい（阿部）。

1 遺構・遺物の概要

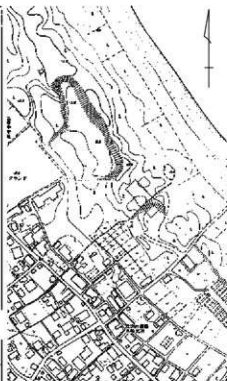
宇治役場裏遺跡は、石川県珠洲市三崎町宇治地内の海岸砂丘に立地（第 2 図 10）し、遺跡の周辺には第 2 図 1 森腰遺跡などの製塩遺跡が多く確認されている。調査の成果は、近世以降の釜場に伴う珪藻土集中・焼礫集中箇所、古代以前の第 2 土器層と第 1 土器層（第 4 図）が確認され、第 1・2 土器層は砂採りによって、一部が破壊されていた（松山ほか 2003）。第 1 土器群は、長さ約 8 m 幅 1 m 前後の範囲に焼土面を作った後に 40 cm の砂を盛り、作業面を作り出している。作業面では焼石やピット状の落ち込みがあり、古代の製塩炉が想定される。製塩土器は尖底が主体で、平底も存在する。第 2 土器層は、長さ 4.5 m 幅 1 m の範囲に土器層が厚さ 90 cm 確認され、製塩土器は尖底だけである。また、



第1図 珠洲市の位置



第2図 遺跡の位置 (1/6万)



第3図 調査区の位置 (1/6千)



第4図 調査区全体図 (1/2千)

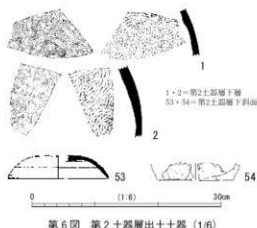


第5図 第2土器層実測図 (1/80)

遺構の変遷や製塩土器の特徴などから、第7図が作成されている。以下、概要をまとめてみたい。

第2土器層（第4・5図、分析資料）は、東方の外列砂丘上にあった製塩炉からその西斜面に土器などが廃棄されて出来たと想定される。製塩土器は尖底であり、下層から須恵器瓦破片（第6図1・2）が出土した。土器層（第5図）は上層（2・6層か）、間層、下層（13・15層）が確認され、製塩土器は下層出土をA群、上層出土をB群とし、下の斜面から53・54などが出土した。第1土器層は下層出土をC1群、中層土器だまり出土をC2群、最上層出土をD群として、特徴がまとめている（第7図）。

A群は、口縁部が大きく外に開くタイプである。胴部径は10cm以下が無く、12cm前後の中型、15cm以上の大型がある。棒状脚は細長いものが多い。B群は、口縁部がやや内湾（46・47）し、胴部が太くなる傾向と底部内面での底形成（51・52）が伺える。太くて短い棒状脚からA群との間に時間差が想定されている。C1類は第1土器層の炉跡直上の灰層出土で、棒状脚は太く短くなり、底部には内面中央に窪みがみられ、底部内面にはヘラ状具で放射状の刻みを入れて外面から棒状脚を強く押し付けたので内面が花卉状に盛り上がる68など、底部形成に変化がみられる。C2群は中層土器だまり出土であり、大型の口縁部は内湾が大きな72・74もある。胴部は、筒状のほか影らむ82などが



第6図 第2土器層出土土器 (1/6)

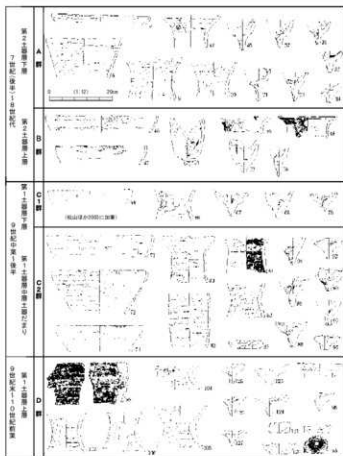
出現する。底部は内面中央部が窪むものや底部の面が明瞭化したものが多く、棒状脚が痕跡化したものもあり、第7図87の平底が伴っている。D群は、中層土器だまりを被覆した層から出土した。頸部が強く縮れて膨らむタイプが主体となり、棒状脚は矮小化・痕跡化し、平底の割合が増加する。

A類は第6図53から6世紀後半、B類は能登町新保C遺跡から奈良時代前後、C1～D類は七尾市赤浦やまあと遺跡から9世紀中葉～10世紀前葉頃と想定されている。しかし、53は2土器群下斜面出土で、同じ場所から平底54も出土しており、A類の年代は検討が必要であろう。珠洲市大谷中学校東遺跡では5世紀後半～7世紀代に細身の倒壺型と棒状尖底（土屋ほか2010）、珠洲市鶴島遺跡A地区では6世紀末～7世紀前半に細身の棒状尖底土器（立原ほか2004）が確認されるが、この3者は宇治役場裏遺跡では確認されない。鶴島遺跡・鶴島ツキザキ遺跡の製塩土器Ⅱ群A・Bは8世紀代とされ、その特徴は宇治役場裏遺跡A・B群と共通する。A類は大型化や長胴化から、鶴島遺跡A地区よりはやや後出が想定されるので、A・B群は7世紀（後半）～8世紀代を想定し、B群には平底が伴う可能性があろう。川畑氏は第6図2が8世紀代の可能性もあるという。平底は8世紀前半に寺家遺跡（小嶋1988）、ナカノA遺跡（三浦ほか1990）、ヤトン谷内遺跡（四柳1997）などでも確認される。

本稿の発端は、数年前に大学同期の阿部氏から製塩関係の土壌サンプルがあれば分析したいと相談を受けたことによる。昨年度当センターの収蔵庫整理により今回分析した資料が確認され、石川県の基準では廃棄予定の資料なので所長と相談して阿部氏に分析を依頼した。発掘調査から24年、報告書刊行から18年を経過したが、資料を保管していたことから今回の成果が得られた。本稿をまとめるにあたり、伊藤雅文、松山和彦氏の協力を得た（久田）。

参考文献

- 小嶋芳孝 1988「製塩土器の検討」『寺家遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
 立原秀明・大西 顕 2004「鶴島遺跡・鶴島ツキザキ遺跡」石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 土屋宜雄・宮川勝次 2010「大谷中学校東遺跡」石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 松山和彦・中西洋司 2003「宇治役場裏遺跡」石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 三浦純夫ほか 1990「赤住遺跡群」志賀町教育委員会
 四柳嘉章 1995「ヤトン谷内遺跡出土の製塩関係土器について」『ヤトン谷内遺跡』中島町教育委員会



第7図 宇治役場裏遺跡における製塩土器の変遷 (1/12)

2 製塩址における堆積の分析

(1) 珪藻分析

珪藻は、10～500 μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。これらのケイソウの生態から、遺跡内の堆積物の由来を想定することができる。特に製塩では、海水や海藻に由来する、本来は陸域に生息しない種類のケイソウが検出される事例が多いことから、混在の少ない堆積物の場合は、有効な方法といえる。

(A) 試料と方法

以下は堆積物から適量を採取し、パレオ・ラボに分析を委託し提出された成果報告を引用し、適宜補筆し、所見をまとめた。

試料は、宇治役場裏遺跡から採取された砂層堆積物8点である（表1）。試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

表1 試料一覧表

分析資料No.	資料名一ラベル	珪藻化石の有無	藻場指標種群の有無
1	②中層	○：海水、◎：海水藻場	○
2	③層	△：海水	×
3	⑤層	△：海水	×
4	7'層	△：海水	○
5	⑧層	○：海水、◎：海水藻場	○
6	14層	△：海水	○
7	上層	△：海水	×
8	下層	○：海水、◎：海水藻場	○

処理重量約1.0gを取り出し秤量した後、ピーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1～2時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、ピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後はマウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上もしくはプレパラートの2/3以上の面積について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を図版1に載せた。

珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種（?）として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種（?）として、汽水種は汽水不定・不明種（?）として、淡水種は広布種（W）として、その他の種はまとめて不明種（?）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、

小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群のうち海水種における環境指標種群と、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群（A）]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群（B）]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群（C1）]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群（D1）]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミノシナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群（E1）]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミノシナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[上流性河川指標種群（J）]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによっては取り除かれてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群（K）]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群（L）]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群（M）]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群（N）]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群（O）]：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群（P）]：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群（Q）]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

[陸生珪藻A群（Qa）]：耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群（Qb）]：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

8試料から検出された珪藻化石は、海水種が18分類群13属9種、汽水種が3分類群2属2種、淡水種が5分類4属2種であった（表2）。検出された珪藻化石は、海水域における3環境指標種群（A、B、C1）と、淡水域における2環境指標種群（M、Qa）にそれぞれ分類された（表2）。

以下では、試料ごとに検出された珪藻化石群集の特徴について述べる。

②中層（分析No1） 堆積物1g中の珪藻殻数は 1.8×10^5 個、完形殻の出現率は67.3%である。主に海水種からなり、淡水種をわずかに伴う。堆積物1g中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、海水藻場指標種群（C1）などの海水種が多く、淡水種をわずかに伴う。

③層（分析No2） 堆積物1g中の珪藻殻数は 3.0×10^3 個、完形殻の出現率は42.9%である。海水種のみが検出された。堆積物1g中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では外洋指標種群（A）

表2 堆積物中の珪藻化石産出表(種群は、千葉・澤井(2014)による)

No.	分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8
1	<i>Actinocyclus</i>	<i>rigens</i>	A	6	4	3	4	6	6	12
2	A.	<i>oceanarius</i>	?		1		2			
3	A.	<i>oculatus</i>	A	4				2	8	4
4	<i>Actinocyclus</i>	<i>senarius</i>	?	2	1	2	1		2	9
5	<i>Biddulphia</i>	spp.	?							1
6	<i>Chaetoceros</i>	spp.	?			4		1	2	6
7	<i>Cocconeis</i>	<i>pseudomarginata</i>	?	1				1		
8	C.	<i>scutellum</i>	C1	152			1	55	1	12
9	C.	spp.	?			1	11			
10	<i>Cocconodiscus</i>	spp.	?	5	2	1	2		5	26
11	<i>Denticulopsis</i>	spp.	?	3	2	1	1		1	21
12	<i>Grammatophora</i>	<i>marina</i>	?	7				16		2
13	G.	spp.	?	4				6		
14	<i>Paralia</i>	<i>sulcata</i>	B	3	1				1	8
15	<i>Rhizosolenia</i>	spp.	?							1
16	<i>Stephanopyxis</i>	<i>corona</i>	?					1	5	10
17	<i>Thalassionema</i>	<i>nitzschoides</i>	A	13	2	3	1		2	30
18	<i>Thalassiosira</i>	spp.	?	2				1	2	53
19	<i>Rhopalodia</i>	<i>acuminata</i>	?					7		4
20	R.	spp.	?					1		
21	<i>Thalassiosira</i>	<i>bramaputree</i>	?						1	
22	<i>Aulacoseira</i>	<i>granulata</i>	M	1						
23	A.	spp.	?							1
24	<i>Diploneis</i>	spp.	?					1		
25	<i>Luticola</i>	<i>mulca</i>	Ca							1
26	<i>Rhoicosphenia</i>	spp.	?	4						
27	Unknown	?	?	7	1	2	3	11	1	3
	外洋	A	23	6	6	6	5		10	44
	内湾	B	3	1					1	8
	海水藻場	C1	152			1	55	1		12
	海水不定・不明種	?	24	6	8	7	36	15	10	80
	汽水不定・不明種	?						8	1	
	細菌浮遊生	M	1							
	原生動物	Ca								1
	淡水不定・不明種	?	4					1		1
	その他不明種	?	7	1	2	3	11	1	3	14
	海水種		202	13	14	13	91	27	54	169
	海～汽水種									
	汽水種						8	1		
	淡水種		5				1		2	
	合計		214	14	16	16	111	29	59	183
	完形殻の出現率(%)		67.3	42.9	50.0	43.8	79.3	41.4	27.1	60.1
	堆積物1g中の殻数(個)		1.8E+05	3.0E+03	2.8E+03	1.7E+03	1.3E+04	1.2E+03	2.5E+03	1.9E+04

と内湾指標種群 (B) がわずかに検出された。なお、海水藻場指標種群 (C1) は検出されなかった。

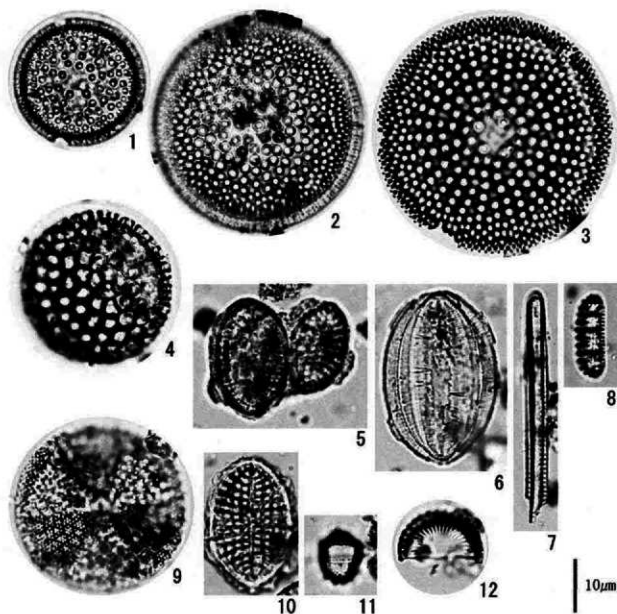
⑤層(分析 No.3) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 2.6×10^3 個、完形殻の出現率は 50.0% である。海水種のみが検出された。堆積物 1g 中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では外洋指標種群 (A) のみがわずかに検出された。なお、海水藻場指標種群 (C1) は検出されなかった。

⑦層(分析 No.4) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.7×10^3 個、完形殻の出現率は 43.8% である。海水種のみが検出された。堆積物 1g 中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では外洋指標種群 (A) と海水藻場指標種群 (C1) がわずかに検出された。

③層(分析 No.5) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.3×10^4 個、完形殻の出現率は 79.3% である。おもに海水種からなり、汽水種と淡水種をわずかに伴う。堆積物 1g 中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、海水藻場指標種群 (C1) が多い。

⑭層(分析 No.6) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.2×10^3 個、完形殻の出現率は 41.4% である。海水種と淡水種が検出された。堆積物 1g 中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、外洋指標種群 (A) や海水藻場指標種群 (C1) などの海水種がわずかに検出された。

上層(分析 No.7) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 2.5×10^3 個、完形殻の出現率は 27.1% である。おも



1. *Actinocyclus ingens* (No.8) 2. *Actinocyclus oculatus* (No.7) 3. *Actinocyclus ingens* (No.1)
 4. *Coccinodiscus* spp. (No.8) 5. *Cocconeis scutellum* (No.1) 6. *Cocconeis pseudomarginata* (No.1)
 7. *Thalassionema nitzschioides* (No.7) 8. *Denticulopsis* spp. (No.2) 9. *Actinocyclus senarius* (No.3)
 10. *Cocconeis scutellum* (No.5) 11. *Chaetoceros* spp. (No.3) 12. *Paralia sulcata* (No.6)

写真1 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

に海水種からなり、淡水種をわずかに伴う。堆積物 1g 中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、外洋指標種群 (A) が多い。なお、海水藻場指標種群 (C1) は検出されなかった。

下層 (分析 No.8) 堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.9×10^4 個、完形殻の出現率は 60.1% である。海水種のみが検出された。堆積物 1g 中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、外洋指標種群 (A) が多く、海水藻場指標種群 (C1) と内湾指標種群 (B) などを伴う。

(B) ケイソウ分析の結果

全ての試料から珪藻化石が検出され、その中で珪藻化石が 100 個体以上検出された試料は、3 点 (分析 No.1, 5, 8) であった。また、その多くは海水種であった。

吉川ほか(2002)によると、宇治役場裏遺跡の周辺は飯塚層(新第三紀後期中新世~中期中新世)の珪藻質シルト岩(珪藻土)が広く分布し、また、第四紀の後期更新世(MIS5e)に堆積した中段丘堆積物も同様に広く分布している。飯塚層の珪藻土は軟質で絶滅種を含む海生珪藻で構成されており(吉川ほか, 2002)、今回検出された海水種の中には、同層から産出する絶滅種(*Actinocyclus* 属、*Denticulopsis* 属、*Stephanopyxis* 属など)や主要構成種(*Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschioides*、*Coccolindiscus* 属など)が含まれていた。したがって、検出された海水種の多くは、飯塚層からの再堆積物が混じっている可能性が高い。

藻塩法による製塩に関わる珪藻化石群集の特徴は、海水藻場指標種群(C1)の *Cocconeis scutellum* 多産であり、筆者らがこれまでにも報告してきた縄文時代の製塩址や藻灰を用いた製塩実験でも確認でき、確度の高い指標である(阿部 2016 他)。

吉川ほか(2002)などの既存研究では、飯塚層中でも *Cocconeis scutellum* は産出するが、卓越するような群集組成を示す試料は見つっていない。よって、*Cocconeis scutellum* が多産傾向を示した分析 No.1 や No.5 と、やや多産傾向を示した分析 No.8 は、再堆積した化石群集の他に、当時の人々の活動の結果付与された珪藻群集も保存されている可能性が高い。なお、これら3試料は、8試料中珪藻化石が比較的多く検出された3試料である。これらの堆積層中における海草付着性の微小生物遺存体の有無の確認は、珪藻分析からの結果の裏付けに重要である。

(2) 微小生物遺存体の分析

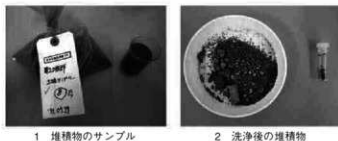
珪藻分析において藻場指標種が検出された8層と「中層」として採取された2つのサンプルにおける微小生物遺存体の分析を実施した。なお、「中層」と記載のあるサンプルは第5図の土層断面には確認することができず、調査時の命名と思われるが、報告書から判断すると「間層」と記載されている層が対応する可能性が高い。土層断面図によると、大別すると製塩土器層と砂質土が互層堆積し、8層は「灰褐色砂質土」と記載されている。

分析は採取されたサンプルから50ccを採取し、0.4mmの篩に入れて、180超超音波洗浄をおこない、土壌と分離をおこない、風乾した後に実体顕微鏡で観察をおこなった。顕鏡の結果、8層において多量のウズマキゴカイの棲管と海藻葉上種と考えられる微小巻貝を検出した。また被熱して円磨された二枚貝の小片、ウニの棘なども発見できた(写真2)。これらの動物遺存体の産状は縄文時代から古代の製塩遺跡の堆積物とよく似ている。中層における検出個体数はすくないものの、ほぼ同様の組成をしめている。土層断面図では製塩土器の堆積層の間層として砂質土層が互層構造を示して堆積しているが、これらは製塩の作業の単位を示しているのかもしれない。同様の堆積構造は愛知県松崎遺跡においても確認されている(愛知県埋蔵文化財センター 1991)。

3 製塩遺跡の堆積物からみた北陸古代製塩の技術

従来の製塩の痕跡とされる珪藻群集の特徴としては、森(1991)が示す製塩に関わる珪藻化石群集の特徴は、海水藻場指標種群(C1)の *Cocconeis scutellum* と陸域指標種群(陸生珪藻)の *Luticola mutica* や *Hantzschia amphioxys* などの多産がある。今回分析した試料のうち2点から海水藻場指標種群が検出された。また、もう一つの指標とされる陸生珪藻A群(Qa)はいずれの試料からも検出されなかった。

ただし、森の指摘する陸域指標種群(陸生珪藻)の存在の背景には、干上がった塩田での環境が想定されているが、古代の製塩では本遺跡を含めて土器製塩が主体であり、塩田遺構の具体的な検出がない現時点では、製塩痕跡の指標としてこれらのケイソウを固定的に重要視する必要はない。今回の



1 堆積物のサンプル

2 洗浄後の堆積物

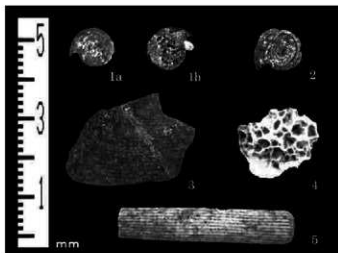


写真2 堆積物より検出された微小生物遺存体

1a ウズマキゴカイ様管(背面)・1b(腹面) 2 被熱したウズマキ

カイの様管 3 二枚貝 4 海綿状の生物遺体 5 ウニの棘

製塩土器の存在から、その形態や製塩址の施設の構造などからの議論が蓄積されてきたが、具体的な製塩の痕跡を堆積物や付着物から分析した事例は少ない。愛知県松崎遺跡(渡辺1991)や福岡県海の中道遺跡(山崎1993)では、古代の製塩土器とともに、海草に付着する微小生物が焼けて検出されたこともあり、製塩に海草が利用されたことが明らかにされたが、今回の発見は日本海側の古代製塩においても7世紀後半から8世紀において同様の製塩技術が存在したことを実証したことになり、その意義は小さくはない。

今回の分析では、製塩土器を含む包含層が調査時に採取・保管されていたこともあり、製塩土器の廃棄層に近接して、おそらく製塩の作業にかかわって形成された堆積物の比較ができたことは、大きな成果である。特に製塩土器の出土層から藻場指標種のケイソウが多く検出されている状況は、我々がこれまで分析してきた製塩遺跡ともよく一致している(阿部ほか2013)。

これらの複数の状況証拠から藻場指標種のケイソウを含む藻灰は、製塩炉の周囲に製塩土器とともに廃棄されたことが推測できる。海草付着性の微小生物遺体や、珪藻の種類や検出個体数からすれば、堆積物の中に海草が焼かれた灰が存在した可能性が高いものと判断できる。

本遺跡は製塩土器を伴う製塩遺跡である点から考えても、北陸地域における土器製塩は藻灰を結晶媒体として利用したものであり、海浜部に形成された本遺跡では、海水を直接藻灰に注いで濃縮媒体として塩を結晶化させる方法(阿部2016)で塩の生産が行われた可能性が高い。

これまで、古代製塩の技術は、製塩土器を利用したことは指摘されつつも、製塩土器で海水を煮沸するという、もっとも単純な方法が想定され、無批判に比較的単純な前提とされてきたのではないかと。いくつかの遺跡では発見された海草利用の可能性が指摘されつつも、具体的な利用実態は不明であっ

分析結果は、むしろ当該期における塩田の存在に疑問を投げかける成果として解釈できる事例である。むしろ本遺跡の場合、藻場指標種よりも海水種が各層より検出されていることが注意される。これらが基盤層の海生堆積物や波浪による海水の飛散などによる遊動個体の可能性を考慮すべきかもしれない。ここでの想定は他の遺跡の事例などとの比較を行いながら、慎重に評価する必要がある。古代北陸地域に製塩遺跡が集中することは、製塩研究の初期より注目され、また平城京から出土した木簡の分析から、古代北陸地域が塩の一大生産地であったことが、これまでにもたびたび指摘されてきた(馬場2013ほか)。

日本古代において塩自体の社会的な需要が高まり、それが政治的な背景をもち、塩の生産に膨大な労働力が投入された結果なのであろう。

一方で、製塩自体の技術に関しては、

た(渡辺 1991・山崎 1993)。しかし筆者らがこれまでに行ってきた製塩痕跡の分析では、縄文時代以来、海草を焼いた灰を利用していたことが明らかにされ(阿部 2016 ほか)、同様の痕跡は愛知県や福岡県の古代製塩遺跡においても確認されていることや、今回の宇治役場裏遺跡においても同様の行為を確認することができた。

もし、これらの想定が妥当であるとするならば、北陸古代の製塩も他地域と同様に藻灰を結晶媒体とした土器製塩(阿部 2016)が行われていた可能性が高いことを示唆する。また、この製塩によって得られる塩は土器の内部に結晶化して固着する、いわゆる「堅塩」であり、「散状塩」ではない。さらに土器を用いた高温下での結晶化では、いわゆる苦汁も生成されないことが筆者らの実験で確認されている。製塩に土器を用いて生産された塩とは、これまでの一部の議論で想定されてきた塩とは異なる。こうした苦汁のない堅塩が北陸において生産され、その一部が調味料として流通したと考えることができる。

これまで、能登地域における古代製塩は、製塩土器と製塩炉あるいは塩田の存在に注目した研究が進められてきたが(富山大学考古学研究室 1991 ほか)、具体的な塩生産の技術、わけても土器を利用した塩の結晶化の技術は具体的に解明されていない。本遺跡の製塩址の堆積物の珪藻分析および海草付着性微小生物遺存体の分析成果から、本地域においても土器製塩の工程の中で藻灰を利用した製塩が行われていた可能性が高まったといえる。

本論文は科学研究費基盤研究 A(研究代表者 阿部芳郎)「日本列島における製塩技術史の解明」(課題番号 19H00545)の研究成果の一部である。また本報告は堆積物のすべてを分析したのではなく、提供された試料の一部の分析にとどまっている。すべての分析結果は後日公開したい。

謝辞 分析にあたっては、石川県埋蔵文化財センターから分析試料の提供を受けた。古代の製塩については奈良文化財研究所の馬場基氏、神野恵氏より多くのご教示をいただいた。若狭地域の製塩研究では入江文敏氏より文献をご提供いただいた。本資料の堆積物の分析では明治大学大学院博士前期課程竹林香葉氏の協力があつた。記して御礼申し上げたい(阿部)。

引用・参考文献

- 阿部芳郎 2016 「藻塩焼く」の考古学」『考古学研究』第 63 巻 1 号 22-42
- 阿部芳郎 2017 「製塩研究のイノベーション」『日本列島における製塩技術史の解明』明治大学資源利用史研究クラスター 43-48
- 阿部芳郎・河西 学・黒住耐二・吉田邦夫 2013 「縄文時代における製塩行為の復元 - 茨城県広畑貝塚採集の白色結核体の生成過程と土器製塩 -」『駿台史学 149』135-159.
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理 42』73-88.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究 27』1-20.
- 近藤義郎 1994 『日本製塩研究』青木書店
- 千葉 崇・澤井裕紀 2014 「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom30』7-30.
- 馬場 基 2013 「文献史料から見た古代の塩」『塩の生産・流通と官衙・集落』第 16 回古代・官衙集落研究会報告書 奈良文化財研究所
- 森 勇一 1991 「珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察」『考古学雑誌 76 (3)』62-75.
- 渡辺 誠 1991 「松崎遺跡におけるブロックサンプリングの調査報告」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 富山大学考古学研究室・石川県考古学研究会 1991 『能登湾・柴垣製塩遺跡群』
- 山崎純男 1993 「出土遺物各論Ⅳ - 自然遺物 -」『海の中道遺跡』Ⅱ 海の中道遺跡発掘調査実行委員会

志賀町北吉田フルワ遺跡の高地性集落について

久田正弘

1 はじめに

能登地方で少ない高地性集落の一つ、志賀町北吉田フルワ遺跡（第1・2図2垣内ほか1993）を検討してみたい。遺構の変遷（第3図）は、第1段階第4～14号竪穴住居の構築：北方溝Ⅰの開削、第2段階北方溝Ⅰの廃止：第1～3号竪穴住居の構築：南方溝と北方溝Ⅱの開削、第3段階遺跡の廃絶（P60）とされたが、南方溝・北方溝Ⅰが同時に開削（P62）との記載があり、矛盾がある。また、環壕の断面図では変遷が想定されるが、記載が無いので土器も含めて原因を基に検討した結果を紹介したい。

2 遺構の検討

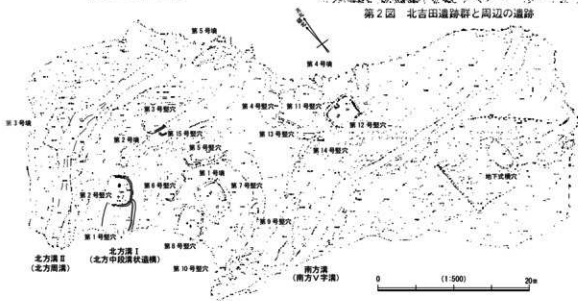
まず、丘陵上の竪穴住居は全て小型であり、遺跡の開始～廃棄まで継続したと思われるが、北方斜面上に立地する第1～3号竪穴住居（以下何号住と省略）は北方溝Ⅰを切っており、開始期よりは新し



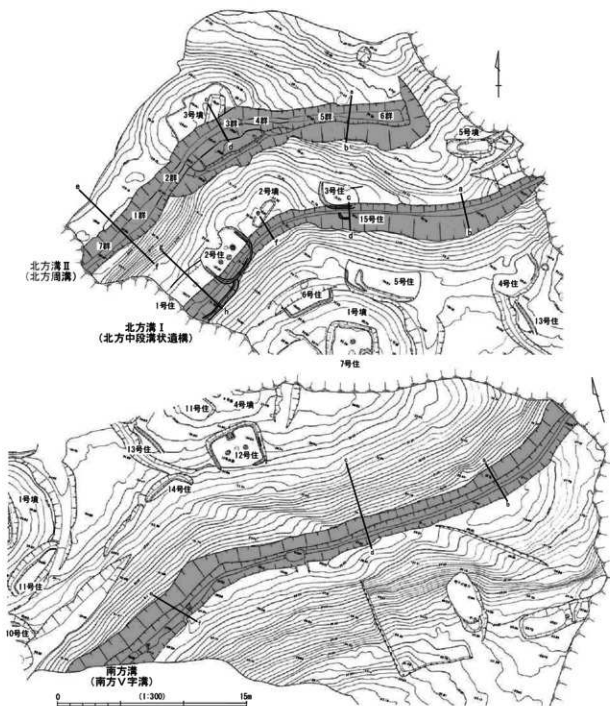
第1図 遺跡の位置



第2図 北吉田遺跡群と周辺の遺跡



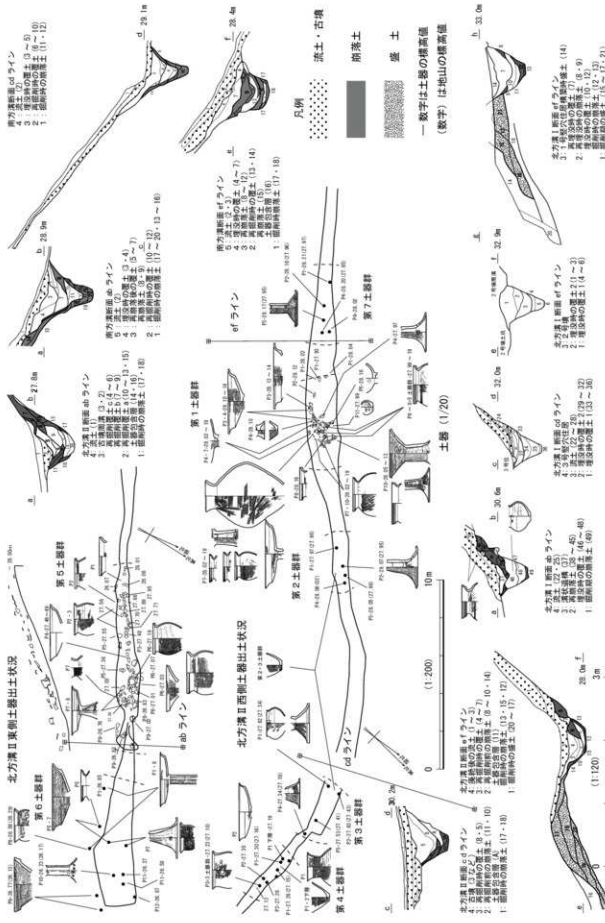
第3図 北吉田フルワ遺跡・フルワ古墳群全体図



第4図 環濠実測図 (1/300)

いと判断した(第3図、表1)。2号住は1号住より新しいとされたが、第58図abラインから1号住の方が新しい。3号住の山側にも壁溝が確認されるので、15号住を想定したい。10号住出土30～37は厳密には下側の近世溝からの出土である。

環濠群(第4図)をみてみたい。南方溝abラインは掘前期埋没が2期(17～20:13～16層)、再掘前1(10～12層)・再掘前2(5～7層)、最終埋没3・4層が確認される。cdラインは掘前期埋没11・12層、再掘前期覆土6～10層、最終埋没3～5層、流土2層が確認される。efラインでは8層以下がV字溝とされ、掘前期覆土16～18層:15層、再掘前期覆土13・14層:8～12層、最終



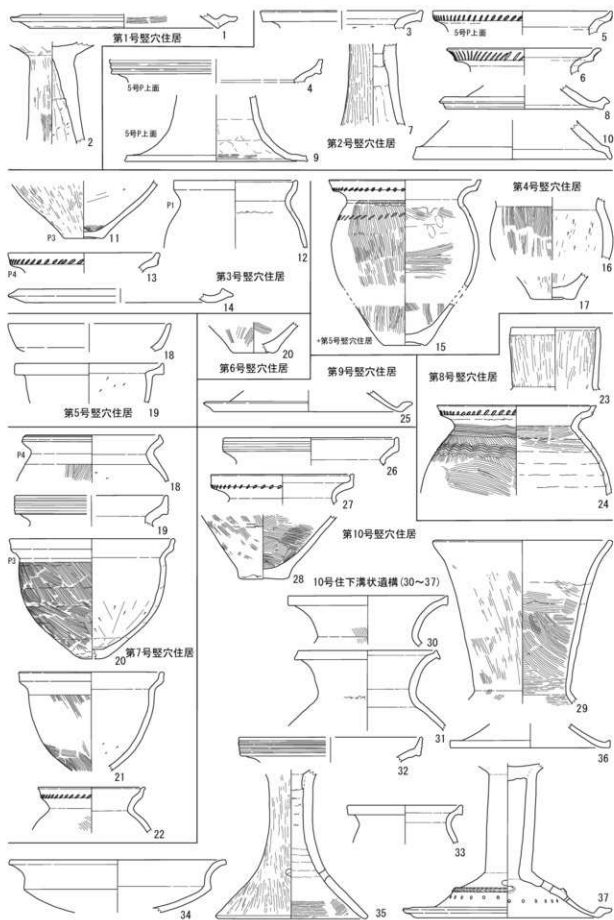
第5図 北方河Ⅱ土器出土状況・溝断面図

埋没4～7層、流土2・3層が確認される。土器は2～6区に分けて取り上げられたのだが区割り図が確認できず、斜面流土中(51・52・58～64)や1号墳周溝(91・92、9号住?)や2号墳周溝(93、北方溝Ⅰ)も南方溝出土とされている。また、北方溝Ⅰabラインでは、掘前期覆土(46～49層)、崩落土38～45層、溝状遺構37層、流土22・25層の4期が確認される。94は環濠出土だが65～102は環濠埋没後の溝出土であり、103・104はその後の流土出土である。cd・ef・ghラインでは埋没時2期が確認され、1・3号住居や2号墳に切られている。北方溝Ⅱabラインでは調査時に4段階(13～18層、7～12層、4～6層、2・3層)が認識されたが、1段階掘前期覆土14・16～18層、2段階再掘前期覆土3期(10～13・15層:7～9層:4～6層)、3段階古墳周溝2・3層、4段階流土1層を想定したい。cdラインは環濠と古墳の2段階だが、環濠では3期(掘前期埋没17・18・A層:再崩落土10・11層:再掘前期の覆土5・8層)が想定される。efラインでは掘前期埋没11～13・15層、再崩落土8・9・10・14層、再掘前期の覆土4～6層、流土1～3層が想定される。これらの検討から、遺構群の変遷(表1)を想定した。南方溝と北方溝Ⅰは掘削～埋没まで1段階3期が想定される。北方溝Ⅰを溝状遺構と1・3号住居が切っており、1・3号住居の前には2・15号住居が想定される。溝状遺構と2・15号住居と同時に北方溝Ⅱが掘削され、南方溝の再掘削が行われたと想定される。南方溝の再掘削2と北方溝Ⅱの再掘削は同時期と想定したい。北方溝Ⅱでは、土器が第1～7号土器群に分けて取上げられ、第1・5号土器群の出土が多く、詳細な調査記録が報告書には掲載されていない。107は1号竪穴住居下西方斜面流土中なので、第7号土器群とした。第1土器群115は第5土器群、第2土器群138は第3土器群、第4土器群146は第3土器群、第6土器群172は第1土器群と接合関係が確認される。また、北方溝Ⅱ出土とされていた173～175は、遺構名から北方溝Ⅰの可能性が高いようだ。

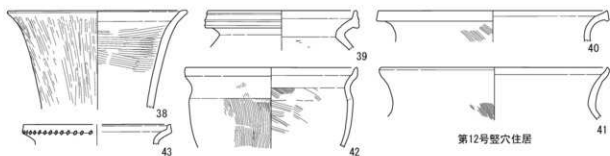
報告書では、丘陵性集落の環濠は防衛性より区画性を重要視したいとされたが、区画ならば丘陵上を横切る溝を掘るべきであり、丘陵斜面に深さ0.9～1.4mの溝を掘る必要はなからう。遺跡は志賀町高浜方面から志賀町富栄方面や七尾市大津方面に抜ける交通の要衝に位置し、四方を見渡せる丘陵上に立地する。北吉田フルワ遺跡の母体は、平成25～27年度に調査された北吉田ノシロタ遺跡(第2図17)などが想定されよう。

第1表 遺構変遷対比表

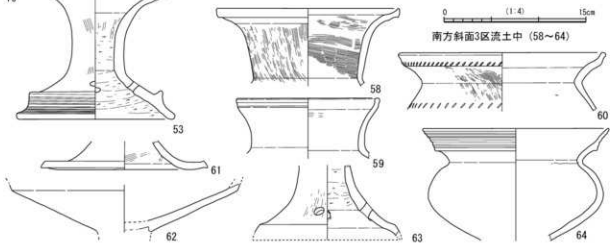
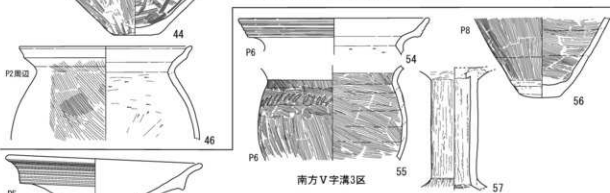
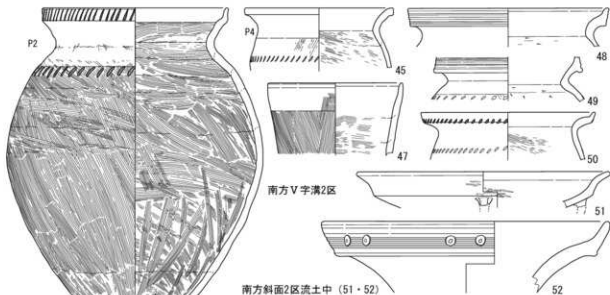
遺構名/段階		1段階				2段階				3段階	4段階
		後期前半～中葉								中葉～古墳前期	古墳後期
南方溝	abライン	掘削	埋没1	埋没2	再掘削1	埋没	再掘削2	最終埋没	流土		
	cdライン	掘削	埋没		再掘削	埋没					
	efライン	掘削	埋没1	埋没2	再掘削	埋没1	埋没2				
丘陵上竪穴住居		構築	→	→	→	→	→	廃棄			1・4号墳
北方溝Ⅰ	abライン	掘削	埋没1	埋没2	溝状	流土					
	cdライン	掘削	埋没1	埋没2	流土	3号住					
	efライン	掘削	埋没1	埋没2							2号墳
	ghライン	掘削	埋没1	埋没2			1号住				
北斜面竪穴住居					2号住	1号住		廃棄			
					15号住	3号住					
北方溝Ⅱ	abライン				掘削	埋没	再掘削	最終埋没	流土		
	cdライン				掘削	埋没1-2	再掘削				3号墳
	efライン				掘削	埋没1-2	再掘削			流土	



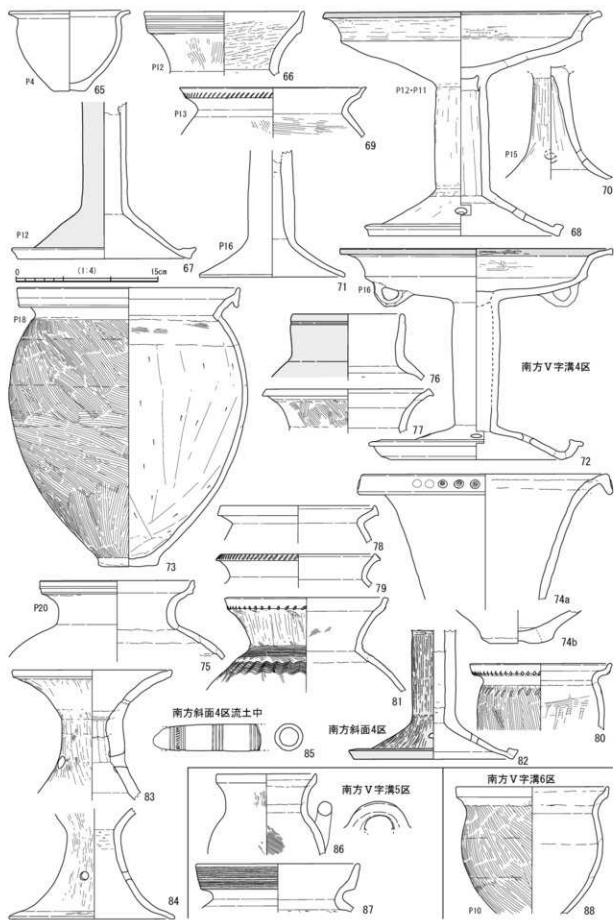
第6图 竖穴住居等出土器



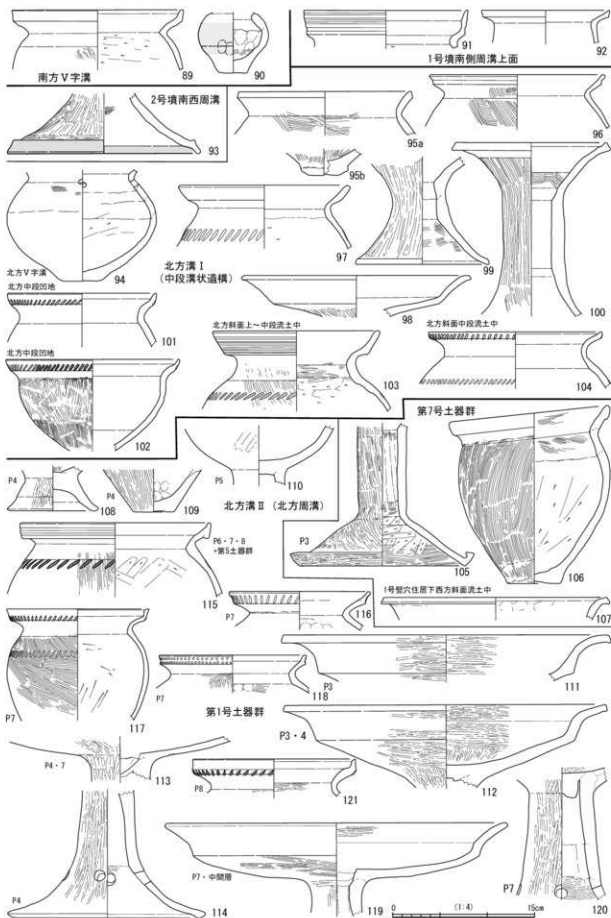
南方溝 (南方V字溝)



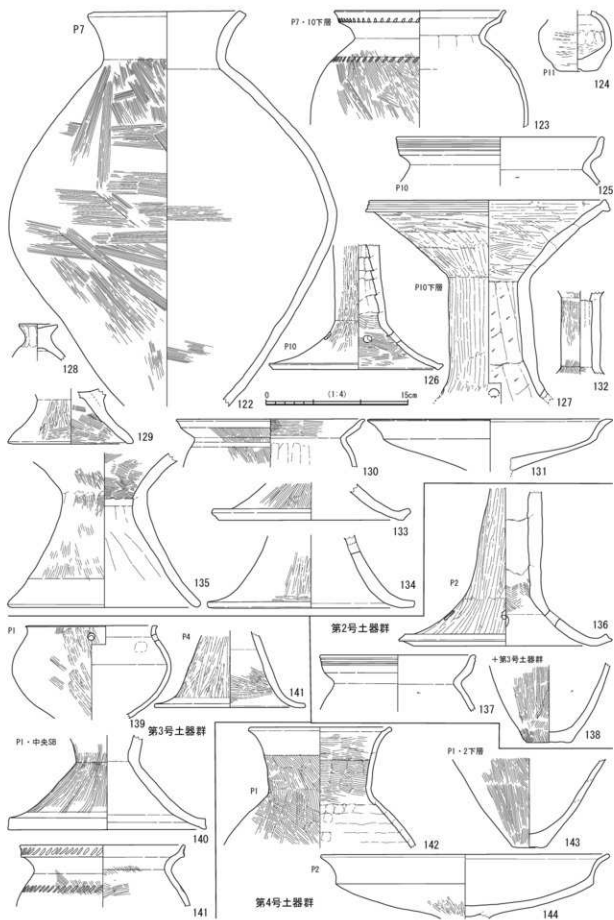
第7图 南方溝等出土土器



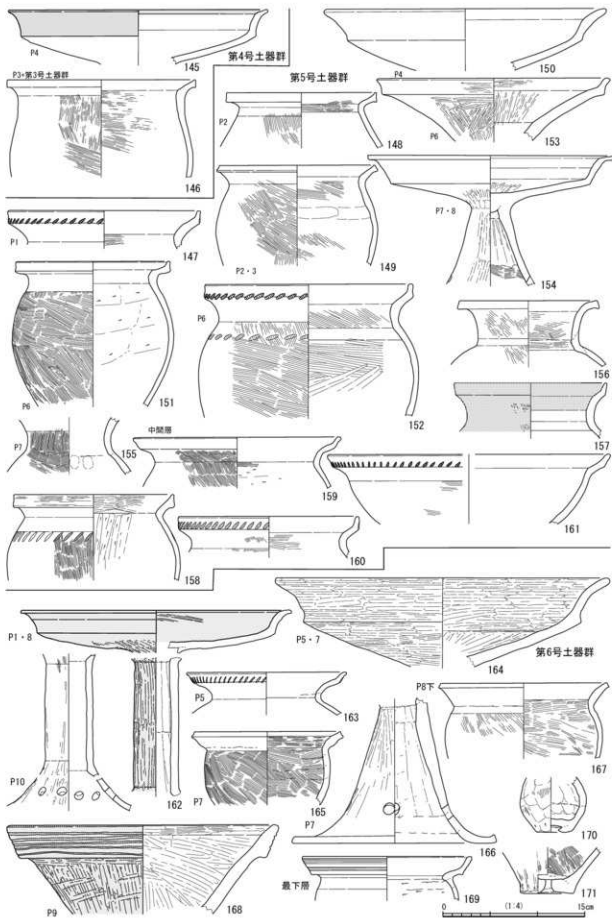
第8图 南方清出土土器



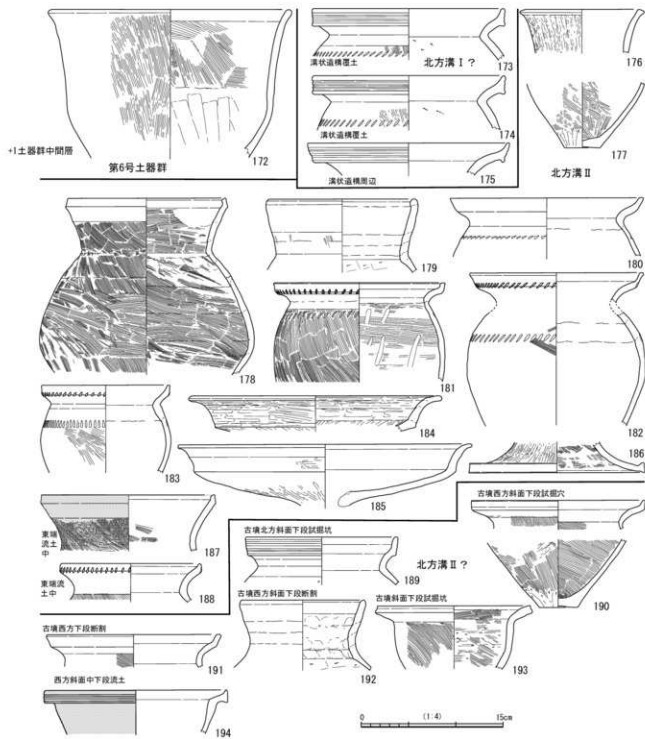
第9圖 南方溝、北方溝 I・II 出土土器



第10图 北方辽II出土土器1



第 11 图 北方汉 II 出土土器 2



第 12 図 北方溝 II 等出土土器

3 土器の検討

報告書では、後期前半の猫橋式を中心とされた。北陸地方の後期土器の指標となる有段凹線口縁甕をみてみたい。39・49は口縁部が少し内傾するタイプと思われ、中期末戸水B式の流れを持つと思われる。他は19などのように口縁部が短く上に伸びるタイプが主体であるが、少し長めの口縁部を持つ152・189、やや長い口縁部を持つ87・91も少し確認される。73は下側に口縁部を拡張するタイプである。能登地方に多いくの字鬚は、口唇部に疑凹線を持つ18は少なく、口唇部を幅広な面取りをする40・42などがあるが、口唇部の形態には差がある。甕とされた54・169は形態などから有段鉢、壺とされた52は器台であろう。74aは口縁部に円形浮文が3個残っており、2個の剥離が確認される。生駒西麓産の可能性も想定したが、茶褐色系であるが角閃石を含まないので違うようである。近年では、生駒西麓産壺は金沢市大友E遺跡で報告がある(楠ほか2021)。高坏の脚部折り返しは、短い8・67・68・82などが多く、上に少し上がる72・105、やや長い1・37もある。受部は口縁部が上に直線的に立ち上がるものは無く、弓状に短く外反する145は少なく、大きく外反するものが多く、やや新しい様相が多い。口縁部内側に面を持つ68・72・154などもある。受部に半環状把手を持つ51・72は少ないが、半環状把手は西念・南新保2・4・3-1期(楠1996)にある。有段鉢54・64・169は法仏式のヘルメット型ではないので法仏式より少し古いのであろう。

4 まとめにかえて

遺構の変遷は大きく2段階7期が想定されるが、各期は同じ時間幅ではないであろう。土器は猫橋式～法仏式初頭の時間幅が想定される。法仏式初頭は法仏I式であるが、これは田嶋氏のV.3群(広義の猫橋式、田嶋2007)にあたる。久田2004第9図下側は猫橋後半～後期中葉の2段階に修正し、概ね後期前半～中葉(3段階)に北吉田フルワ遺跡も併行するのであろう。今回の検討を行った理由は、図版や記載内容に違和感を持ったからでもあり、土器のトレースは全て筆者が行った。その結果、新たな問題も明らかになった。

能登地方では後期前半の資料が少なく、筆者の解釈にも不備は多いと思われるが、この報告を基にして新たな視点で検討を願いたい。伊藤雅文、林 大智、和田龍介氏から協力を得た。

参考文献

- 垣内光次郎ほか 1993「北吉田遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
金山哲也・関 晃史 2015「北吉田ノシロタ遺跡」[石川県埋蔵文化財情報第34号](財)石川県埋蔵文化財センター
楠 正勝 1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」[西念・南新保遺跡IV]金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 2021「大友E遺跡」金沢市埋蔵文化財センター
田嶋明人 2007「法仏式と月影式」[石川県埋蔵文化財情報第18号](財)石川県埋蔵文化財センター
端 猛 2016「北吉田ノシロタ遺跡」[石川県埋蔵文化財情報第35号](財)石川県埋蔵文化財センター
久田正弘 2004「南加賀地方における弥生時代の一様相」[石川県埋蔵文化財情報第11号](財)石川県埋蔵文化財センター

古代以前の七尾城跡について

久田正弘

1 はじめに

石川県七尾市内の七尾城跡は中世の山城として有名であり、一部が国指定史跡に登録されている。七尾市教育委員会が中心となって発掘調査が行われてきたが、能越自動車道建設に伴い、石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施（第2図）し、その一部が報告された（三浦ほか2020・藤田ほか2021）。筆者は現場担当者ではないが、古代以前・木製品の報告を担当することとなった。古代以前は図版が作成されており、時間と頁の関係から報告書に実測図の追加や遺構との関係を提示出来なかった。報告書の刊行後に、選別された資料の中から未実測の遺物を図化し、報告済みの資料とともに遺構との関係をみてみたい。

2 各調査区の出土遺物について

まずは、調査区東側の16～18区（第2図）は谷部（第3図蹴落川地区）であり、17区から第11図159～162を報告した。17区南は中世の遺構（第11図161・162）、17区北は確認トレンチ（159・160）から出土した。谷部の同一面か下層面に古代の集落が存在した可能性があろう。

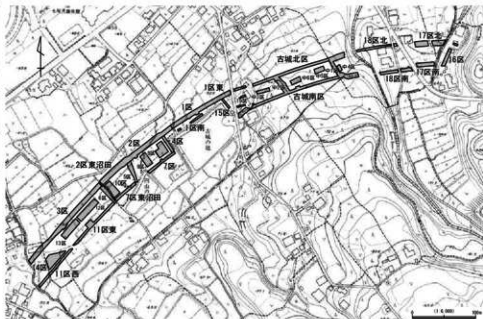
丘陵上の古城地区（第2・4図）では、古城北3区～古城中2区で縄文時代の石器と古代の有台坪を報告（第11図156～158）したが、選別されていた遺物は無かった。19-2区版築盛土の須恵器（藤田・久田2021第7図67）は朝鮮陶器であろうかと判断したが、現在は瀬戸・美濃焼の筒状香炉が被熱を受けたものと判断している。

総構の外側は、1区東～3区・15区～11区西（第5～8図）にあたり、中央に沼田（鞍部）がある。1区東・15区（第5図）では、古代以前の遺物は殆ど出土していない。1区（第5・6図）では中央部の遺構から古代の須恵器（第9図1～9）が出土しているが、遺構の時期は中世であろう。

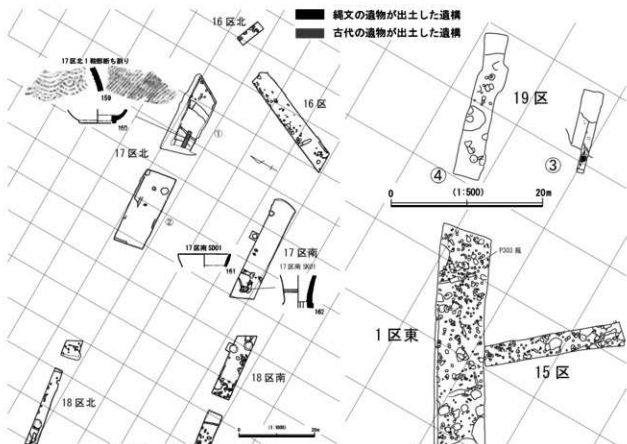
2区は1区西側～2区東沼田の間にあたり、南側に4・7～9区がある（第6図）。第9図10～54



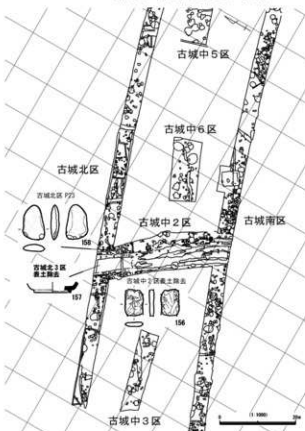
第1図 遺跡の位置



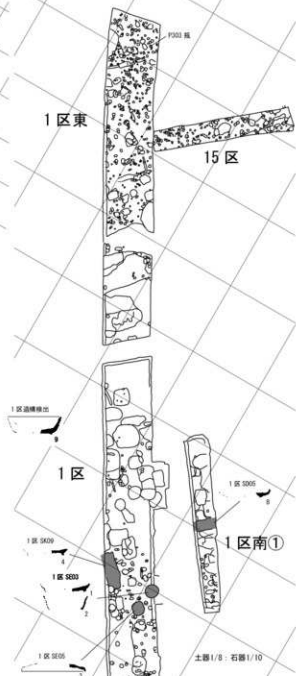
第2図 調査区配置図



第3図 調査区全体図1 (部分)



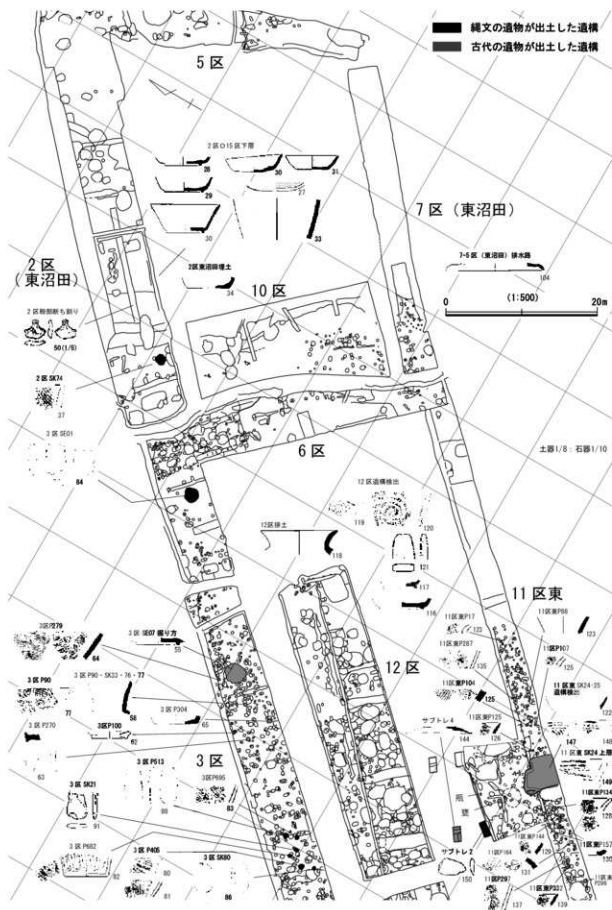
第4図 調査区全体図3



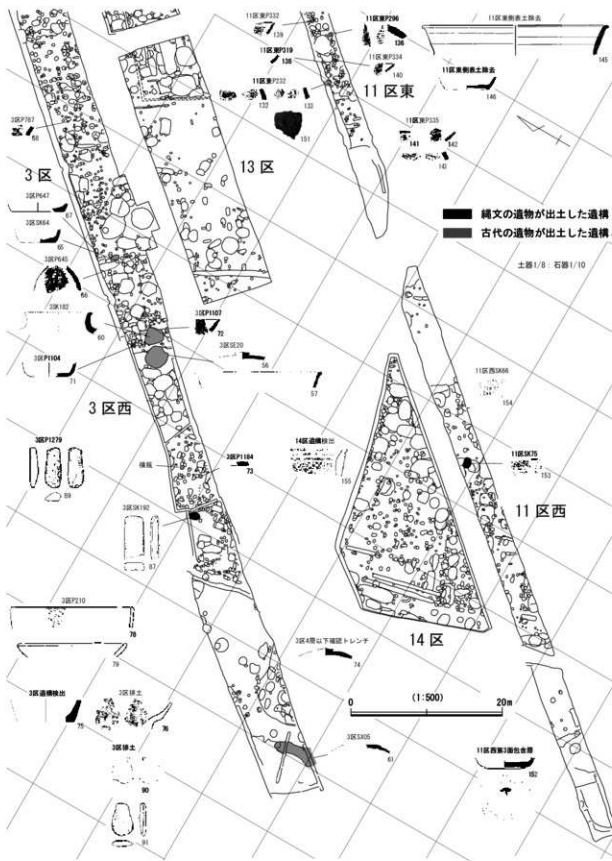
第5図 調査区全体図4 (部分)



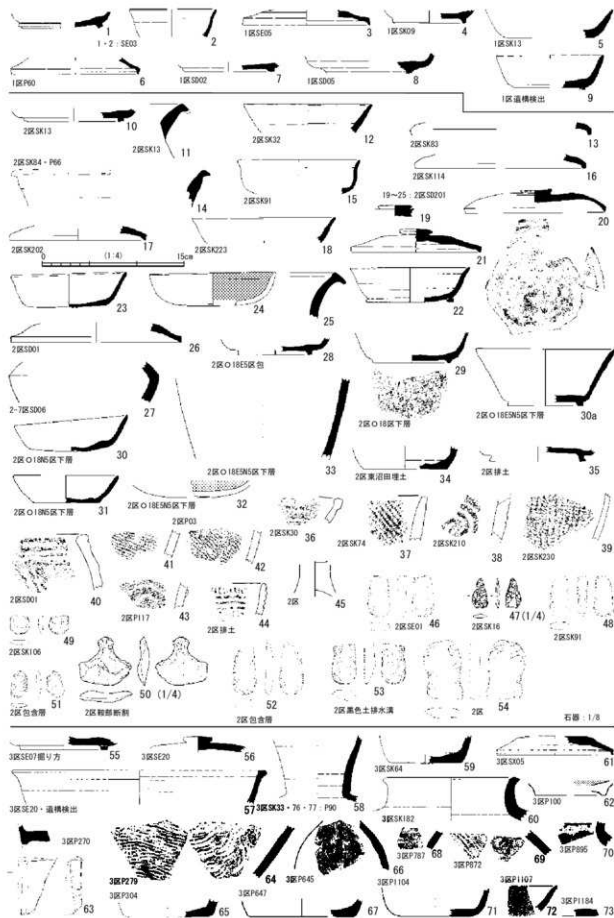
第6図 調査区全体図5



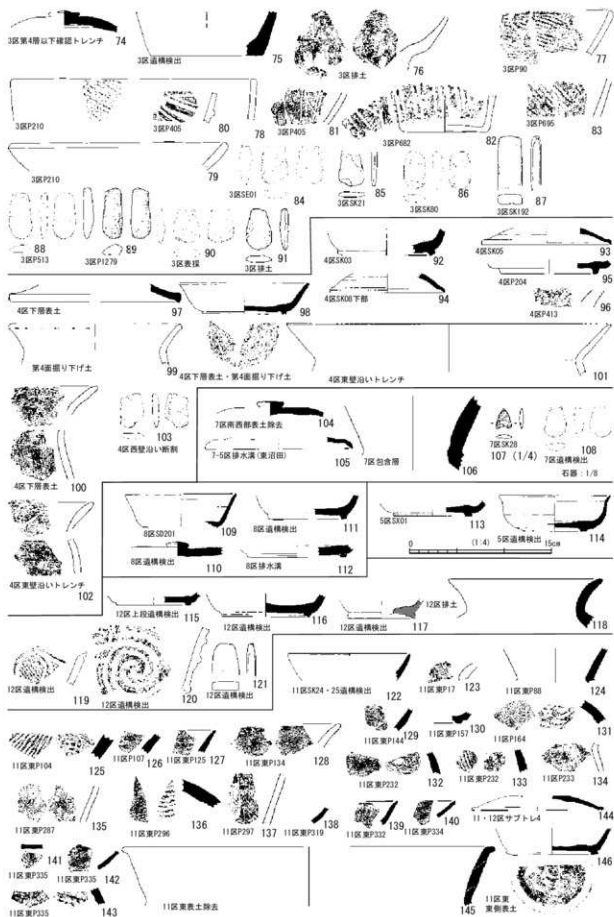
第7図 調査区全体図6



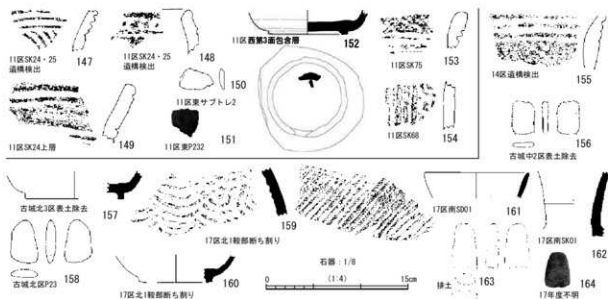
第8図 調査区全体図7



第9図 古代以前の遺物 1



第10図 古代以前の遺物 2



第11図 古代以前の遺物 3

を提示した。古代の遺物は3箇所に分散しており、自然河道SD201(8区SD201に続く)は北陸古代Ⅳ期(天嶋1998)が少しまとまっているが、他は中世の遺構からの出土であろう。2区から弥生土器の高坏(45)、縄文時代では中期前葉後半～中葉の土器、打製石斧(石鈿)などが出土している。

2区東沼田の下層(第7図、自然河道か)から、Ⅳ～Ⅵ期(28～32)が出土し、周辺などから縄文土器37・打製石斧84も少し出土している。

4区は2区の南東側(第6図)に位置し、4面の確認調査が行われた。2面には石組井戸(SE301)があり、4面より下には遺構・包含層は確認されなかった。第10図92～103を提示した。須恵器は中世の大型遺構からの出土と思われるが、下層表土(97・100)や4面掘り下げ土(98・99)は古代の包含層出土と想定されることから、古代の遺構面も下層などに想定されよう。

8区は4区の西側(第6図)にあたり、確認調査のみである。第10図109～112を報告したが、選別された遺物はない。8区SD201は2区SD201に続く自然河道であり、109を報告した。

7区は2区の南側に並行する調査区(第6図)であり、縄文時代の石器(第10図107・108)と古代の須恵器(104～106)を報告した。その西側には7区東沼田(第7図)があり、排水溝から第10図104が出土した。

5区は2区東沼田の南側に位置する調査区(第6・7図)であり、古代の須恵器(第10図113・114)を報告した。

3区は2区の西側に位置する調査区(第7・8図)であり、3区西(第8図)も設定されている。第9図55～第10図91を提示した。古代の遺物は、2箇所に集中するが、出土した大きな遺構の時期は中世と思われる。縄文土器・打製石斧は第7図下側に集中しており、縄文の遺構(竪穴住居)の可能性もあろう。しかし、中世の遺構の可能性が高いならば、周辺に縄文の遺構か包含層が存在したと判断できよう。82の拓本は左側を追加し、P405は80以外に81を図化した。3区P100出土の土師器内黒有台塚は10～11世紀代(Ⅵ・Ⅶ期)と思われ、古代の中では一番新しい。3区排土には、古代の製塩土器(尖底)が存在した。棒状尖底は短いと思われ、内面にはシボリがあり、外側は棒状部の接合には指頭圧痕を持つ。胎土には海面骨針を含む。

11区東は7区東沼田の西側に位置する調査区(第7・8図)であり、その西側に11区西が存在する。

第10図122～第11図154を提示した。古代以前の遺物が出土した大型の遺構は中世と思われるが、再片の遺物はピット出土が多いので時期の特定は難しいと思われる。今回提示した未報告資料は全て細片だが、煮沸具(123・128・134・135・137)があるので、周辺に古代の集落が存在した可能性が高いと思われる。縄文土器は中世の遺構からの出土と思われるが、前期後葉の福浦上層147、中期前葉後半の徳前式148・149が確認される。11区西では中期中葉153・154、14区では中期前葉後半が確認された。

12区は3区と11区東の間にある調査区(第7図)であり、西半分が大きく削平されているようである。遺構検出や排土から、第10図115～121を報告した。119・120は中期中葉であろう。

13区は12区の南側に位置する調査区(第8図)で北東隅以外は削平されているという。古代以前の遺物は選別されていないようである。

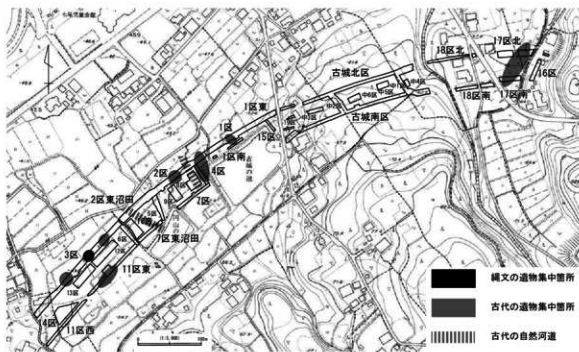
14区は13区の南西側、11区西の北側の調査区(第8図)であり、遺構検出で出土した第11図155を報告した。縄文中期前葉後半～中葉初頭(徳前～新崎式)であろう。

表1 遺物観察表

番号	区	遺構名	種類	数量	備考	遺構名	種類	数量	備考	区	遺構名	種類	数量	備考	遺構名	種類					
1	1	S033	溝	有台坪	42	P03	縄	深鉢	83	3	P065	縄	深鉢	124	11	葉	P08	溝	底		
2	1	S033	溝	坪	43	P117	縄	深鉢	84	3	S01	石	打製石片	125	11	葉	P104	溝	壁		
3	1	S035	溝	溝	44	2	埴	深鉢	85	3	SX21	石	打製石片	126	11	葉	P107	溝	底		
4	1	SX09	溝	有台坪	45	2	弥	高坪	86	3	SX80	石	打製石片	127	11	葉	P125	溝	坪		
5	1	SX13	溝	有台坪	46	2	S01	石	打製石片	87	3	SX182	石	磨製石片	128	11	葉	P134	土	壁	
6	1	P00	溝	溝	47	2	SX16	石	石籠	88	3	P513	石	打製石片	129	11	葉	P144	溝	坪	
7	1	S002	溝	有台坪	48	2	S001	石	打製石片	89	3-2	P179	石	打製石片	130	11	葉	P157	溝	有台坪	
8	1	S005	溝	有台坪	49	2	SX106	石	打製石片	90	3	換保	石	打製石片	131	11	葉	P164	溝	壁	
9	1	遺構検出	溝	有台坪	50	2	新野新ち敷り	石	石籠	91	3	埴	石	打製石片	132	11	葉	P232	溝	壁	
10	2	SX13	溝	有台坪	51	2	包倉	石	打製石片	92	4	SX03	溝	有台坪	133	11	葉	P232	溝	壁	
11	2	SX13	溝	底	52	2	包倉	石	打製石片	93	4	SX05	溝	溝	134	11	葉	P233	土	壁	
12	2	SX22	溝	坪	53	2	黒色土排水溝	石	打製石片	94	4	SX06下部	溝	溝	135	11	葉	P287	土	壁	
13	2	SX23	溝	溝	54	2	埴	石	打製石片	95	4	P254	溝	有台坪	136	11	葉	P296	溝	壁	
14	2	SX64、P66	溝	溝	55	3	SX07掘り方	溝	有台坪	96	4	P413	縄	深鉢	137	11	葉	P297	土	壁	
15	2	SX91	溝	坪	56	3	SX20	溝	溝	97	4	下層倉土	溝	溝	138	11	葉	P312	溝	坪	
16	2	SX114	溝	坪	57	3	SX20、遺構検出	溝	溝	98	4	下層倉土・4層掘り下げ土	溝	有台坪	139	11	葉	P332	溝	坪	
17	2	SX202	溝	溝	58	3	P90、SX13、SX76、SX77	溝	底	99	4	4層掘り下げ土	土	溝	140	11	葉	P334	溝	坪	
18	2	SX223	溝	坪	59	3	SX64	溝	底	100	4	下層倉土	土	溝	141	11	葉	P335	溝	坪	
19	2	S0201	溝	溝	60	3	SX182	溝	包倉	101	4	東壁沿いトレンチ	土	溝	142	11	葉	P335	溝	坪	
20	2	S0201	溝	溝	61	3	SX05	溝	溝	102	4	東壁沿いトレンチ	土	溝	143	11	葉	P335	溝	坪	
21	2	S0201	溝	溝	62	3	P100	土	有台坪	103	4	西壁沿い新敷	石	打製石片	144	11	葉	11-13区サブトレンチ	溝	壁	
22	2	S0201	溝	有台坪	63	3	P270	溝	灰瓦	104	7	南西部土敷土	溝	溝	145	11	葉	溝土敷土	溝	壁	
23	2	S0201	溝	有台坪	64	3	P279	溝	溝	105	7	7-5区排水溝	溝	146	11	葉	東側溝土	溝	有台坪		
24	3	S0201	土	坪	65	3	P304	溝	底	106	7	包倉	溝	底	147	11	葉	SX24-25遺構検出	溝	深鉢	
25	2	S0201	溝	溝	66	3	P645	溝	溝	107	7	SX25	石	石籠	148	11	葉	SX24-25遺構検出	溝	深鉢	
26	2	S001	溝	溝	67	3	P647	溝	有台坪	108	7	遺構検出	石	打製石片	149	11	葉	SX24-25遺構検出	溝	有台坪	
27	2	S009	溝	底	68	3	P787	溝	底	109	8	S0201	溝	有台坪	150	11	葉	サブトレンチ	石	籠	
28	2	018区包倉	溝	有台坪	69	3	P672	溝	溝	110	8	遺構検出	溝	溝	151	11	葉	P232	石	打製石片	
29	2	018区下層	溝	有台坪	70	3	P965	溝	溝	111	8	遺構検出	溝	有台坪	152	11	西	東側包倉	溝	有台坪	
30	2	018区下層	溝	有台坪	71	3	P1104	溝	有台坪	112	8	排水溝	溝	有台坪	153	11	西	SX75	溝	深鉢	
31	2	018区下層	溝	有台坪	72	3	P1107	溝	坪	113	5	SX01	溝	有台坪	154	11	西	SX68	溝	深鉢	
32	2	018区S区下層	土	内堀	73	3	P1184	溝	坪	114	5	遺構検出	溝	有台坪	155	14	葉	遺構検出	溝	深鉢	
33	2	018区S区下層	溝	底	74	3	第4層土下層掘りトレンチ	溝	溝	115	12	上段遺構検出	溝	有台坪	156	古	城	中	倉土跡	石	打製石片
34	2	東沼埋土	溝	底	75	3	遺構検出	溝	底	116	12	遺構検出	溝	有台坪	157	古	城	北	倉土跡	溝	有台坪
35	2	埴	溝	有台坪	76	3	埴	製	底	117	12	遺構検出	底	有台坪	158	古	城	北	P23	溝	有台坪
36	2	SX20	縄	深鉢	77	3	P90	縄	深鉢	118	12	埴	溝	底	159	17	区	新野新ち敷り	溝	壁	
37	2	SX74	縄	深鉢	78	3	P210	縄	深鉢	119	12	遺構検出	縄	深鉢	160	17	区	新野新ち敷り	溝	有台坪	
38	2	SX210	縄	深鉢	79	3	P210	縄	深鉢	120	12	遺構検出	縄	深鉢	161	17	区	S001	溝	坪	
39	2	SX230	縄	深鉢	80	3	P405	縄	深鉢	121	12	遺構検出	石	磨製石片	162	17	区	SX01	溝	長	
40	2	SX20	縄	深鉢	81	3	P405	縄	深鉢	122	11	遺構検出	溝	坪	163	17	区	埴	土	石	磨製石片
41	2	P00	縄	深鉢	82	3	P682	縄	深鉢	123	11	葉	P17	土	溝	164	05	年度	石	磨製石片	

3 おわりに

七尾城跡では、中世の遺物が大量に出土し、大量に図化されている。しかし、縄文時代前期後葉～中期中葉の縄文土器、縄文時代の石器、弥生時代の高坏、古墳時代以降の土師器甕、古代の須恵器・土師器の出土が確認できた。古代以前の遺物は細片が多いことや中世の大型遺構からの出土が多いので、中世の時期に遺構や包含層は破壊された可能性が高い。しかし、縄文時代では3区で遺物が集中する箇所（第7図下）があり、堅穴住居が想定されよう。古代は、2・8区SD201と2区東沼田の鞍部（自然河道）に土器がまとまって出土する程度だが、2・8区SD201の周辺（4・7・8区）や3区の東側・西側や11区東には、古代の遺物が少し出土しているので、周辺に古代の掘立柱建物などが存在した可能性が想定される（第12図）。また、17区周辺にも古代の遺構が存在した可能性が想定される。そして、第9図62を図化したことにより、10・11世紀代にも遺構が存在した可能性が指摘出来た。



第12図 遺構配置概念図

筆者は、古代の遺物についても詳しく語る素養はないが、報告書未掲載遺物の報告と出土遺構を提示したので、今後の報告や論文などに寄与できれば幸いです。遺跡の報告では、遺構編と遺物編に分けて刊行するやり方もあるが、その場合には総括編などで遺構と遺物の関係を明らかにすべきであろう。今回、一部の遺構の位置を特定出来なかったことが悔やまれる。報告書作成から本稿まで、伊藤雅文、金山哲哉、川畑 誠、藤田邦雄、和田龍介氏の協力を得た。

参考文献

- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 「北陸の古代土器研究の現状と課題」
川畑 誠 2015 「素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について」『石川県埋蔵文化財情報第34号』（公財）石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
藤田邦雄・久田正弘 2021 「七尾城跡Ⅱ」石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
三浦純夫・川名 俊 2020 「七尾城跡Ⅰ」石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター

石川県埋蔵文化財情報

第45号

発行日 2021（令和3）年9月30日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <https://www.ishikawa-maibun.or.jp>
E-mail address daiyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 前田印刷株式会社

©（公財）石川県埋蔵文化財センター